詰め合わせ。

ゆきみね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
詰め合わせ。

【Ｎコード】
Ｎ５３６７Ｔ

【作者名】
ゆきみね

【あらすじ】
ふと思いついた小話をちょろっとあげる詰め合わせ集です。お暇な時にどうぞ！／ちょっとした息抜きものですので、いつも以上に不定期更新です。／シューベン・しぇいも共に未完、執筆中です。／更新する際は、各小話に関わらず「最新投稿」の章に、次話投稿まで最新のお話を置いています。

登場人物

サリュエナ・ルー（２０）
　ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーク店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。現在はサリア（１３）としてティーの護衛の仕事をしている。軍事訓練の経験がある。独身彼氏なし。

ロイ・シューベン（３２）
　シューベン家長男。少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性。性格は温厚で人当たりがよい。商家として培った情報収集能力は桁違いだが、使い所がおかしいことがある。サリアもといサリュエナにぞっこん。

クイット・シューベン（２５）
　シューベン家次男。腰まで伸びる茶色い長髪を首の後ろの部分でまとめている。シューベン家のプレーボーイ。誰もが認める美形で、女性の陰が絶えない。のらりくらりと気だるげに生きているが、情報収集能力においてはロイに劣らない。

ベル・シューベン（１８）
　シューベン家三男。赤茶けた短髪。一般的な筋肉量だが、シューベン家の中ではがっしりしている方なため、通称筋肉ダルマ。シューベン家の中で最も常識人で不幸人。一応学生。

クレア・シューベン（１６）
　シューベン家長女。栗色の髪。サリュエナの経営するアンティーク雑貨店がお気に入り。いたって普通の女の子。

ティー・シューベン（１４）
　シューベン家四男にして末っ子。茶色い短髪。小生意気な口を聞くこともあるが、尊敬する相手にはその尊敬の念を隠さない。サリアのように強くなるため、日々鍛練中。

実は私、

「僕のサリアを知りませんか」
いつ誰がお前のものになった。
思わずヒクッと上がった口角を無理矢理ただし、私は「見かけてませんね…」と苦し紛れに返した。

私には特定一部の人間にしか打ち明けていない秘密があった。当然特定一部に含まれない彼には秘密を明かしてはいなかった。が、「サリアはとっても可愛い子なんです。セミロングの黒髪が歩く度に揺れて、クリアブルーの瞳がとてもきらきらしていて。それはそれは男心をくすぐるっていうか…。兎にも角にも将来有望だから、その辺をふらつかせておくと悪い大人に引っかかってしまうかもしれない。そんなことになったら僕はもう自制がきかないんじゃないかと思っています。だってあの子は１３にしてあんなに大人びていて、尚且つまだ子供のあどけなさを残していて、とても愛くるしいったらないんですから。今はペッタンコだけど、それも成長に伴って修正されていくと思っています」
ここまで来たら、もう暴露させてほしくなる。言わなかった私が悪いかったんです、だからもうやめてください、熱のこもった目で１３歳の少女の可愛さを熱弁しないで下さい。１３歳でペッタンコなのは仕方ないんです、放っておいてあげてください……。
「だから、見つけたら教えて貰えます？　今どこで何をしているかと思うと気が気じゃないので」
「え？　え、えぇ、わかりました…」
一瞬飛んでいた思考をなんとか引き戻し、私が苦笑いを返すと、愛を語り終えた彼はにっこり笑って石畳の向こうへと去っていった。
その男はロイ・シューベン、見た目こそ２０代前半だが、正真正銘の３２歳独身。

（こんな一面知りたくなかった…）

私、サリュエナ・ルーは大きくため息を吐いた。私は今、ウェーブのかかった黒髪をハーフアップにし、濃紺のワンピースを身にまとっている。見た目の年齢も２０歳くらいで、ぼんきゅっぼんとまではいかないものの、大人の女性らしい体つきをしているという自負はある。だからいくらサリアとの見た目に共通性があっても、自分から彼に秘密を暴露しない限り気付かれないだろうと信じていた。だが、さっきの愛の語りっぷりを見ると、「本当に気づいていない」のか、「気づいていないふりをした羞恥プレイ」なのかわからなくなる。後者ならなんて拷問だ。

（こんな仕打ちを受ける位なら、もういっそ言ってしまいたい…！）

サリアとサリュエナは同一人物である、と。

見た目の年齢をいじれる、それがサリュエナの秘密だ。とどのつまり魔女である。魔女とは忌避されるものでは無いが、希少で貴重な存在であるため、多くの魔女が自分が魔女であることを隠しながら生きているのが現状だ。たまに公にしている人達もいるが、その人達はバックに大きな貴族が付いていたりして、身の安全が保障されているからそういうことが出来る。一般の魔女が自分は魔女だなどと宣言したら、次の日から魔女という存在を慕ったり物珍しさで訪れたりする人々に家の周りを埋め尽くされ、外に出ることもままならなくなるだろう。その中には魔女を自分のものにしようという危ない人間もいるので、尚更公言する者は少ない。

そうやって魔女であることを隠していても、所詮は人間。食い扶持を稼いで生きて行かなくてはいけない。だから大半の魔女は、気の合う魔女同士でコミュニティを形成して情報を交換しながら、個々特有の能力を密かに用いて生活していた。

私自身もこの秘密を生かし、今までいろんな仕事をこなしてきた。今回はとある商家の方から、息子の学校での身辺警護を依頼された。

故に一番手っ取り早い方法として、１３歳の娘の姿になり、側に控えることにしたのだ。勿論依頼者と自分の間には仲介人がいるので、依頼者も息子も私の秘密は知らない。せいぜい「１３歳にしては強い女の子」くらいの認識だろう。曲がりなりにも軍や傭兵部隊を擁している国なので、魔女と疑うよりも、そっちだと認識した方が現実味がはっきりするものなのだ。

こうやって魔女はなんとか存在を隠しながら一生懸命生きている。だから簡単に魔女だと公言するつもりは実際無い。

（でもあんなに幼女に期待をかけられたら、魔女どころか、実は２０歳だなんて絶対言えない……）

２０歳といえば、まだまだ女も盛りだし、と今までは大した年齢詐欺ではないと思っていた。しかし１３の娘に愛を語る男に、実は２０歳です！なんて言ったら、とりあえず陽の目を拝めなくなりそうで怖い。

ぶるりと身を震わして、ロイの姿を思い描く。ロイはサリュエナの仕事の対象である、１４歳のティー・シューベンの兄だ。身長は１７０位、少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性である。性格も温厚で人当たりがよい。実に好ましい男性だ。更に言うなら依頼者の息子の一人なのだから、それなりに地位のある人間なのだが、一切偉ぶったりしないところも好ましいと思っていた。普段からサリアをティーの護衛兼友人として大事に扱っていてくれたこともあって、自分がひどく懐いて自覚はあった。

（だけどやっぱりロリコン…）

ロイとヒューの歳が離れすぎなのも結構気になるが、それは問題ではない。問題は２０歳近く離れた弟と近い年の娘に愛を語ることである。

サリアで居る時は一切見かなかったロイの一面に、引かずにはい

られないサリュエナだった。人間必ず何か隠し事があるものだが、性癖の隠し事ほど怖いものは無い。年齢詐欺だなんてまだまだ優しい方だ。

実は、「ロイの場合」

ロイの場合

青くなったり赤くなったり、彼女はとても忙しそうだった。自分でも言いすぎかと思ったが、まぁあの位彼女の肝を冷やさせるのが丁度よかったのだろう。

「あれでばれてないと思っているんだから、更に愛おしい」

ロイはフッと笑んで、自分の部屋の隅に置いておいた鞄から書類をだし、視線を落とした。

サリュエナ・ルー、２０歳。身長１６２、ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーク店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。軍事訓練の経験があり、現在独身彼氏なし。

個人情報てんこ盛りの書類には、ご丁寧に全身とバストアップの写真まで付けている。自分で情報収集をしただけある、なんて綺麗な写りだろう。

「家族と同居さえしていなければ僕の部屋にポスターにして貼るんだけど…」

自分を慕う淑女諸君の前では絶対言えないようなストーカー的発言をぽろりと落とす。しかし5人兄妹の長男である自分の部屋には、よく弟や妹が、一緒にゲームをしに来たり、勉強を教えて貰いに来たり、怒らせた父親から隠れに来たり、新しい女性から逃げて来たりするものだから、滅多なことはできない。

（…いや、女性から逃げてくるのをわざわざかくまってやる必要はないんだけど…）

１番年上の弟、クイットは女癖が悪い。兄も認める美形だから女

性のおっかけが後を絶たないのは仕方ないとはいえ、もう２５なのだから自分でどうにかしてほしいものである。
（ティーはまだ遊び盛りだからいいかな。クレアはまだ１６だけど、人一倍勉強を頑張っているから手伝ってあげなくちゃ。ベルは、まぁ１８歳で反抗期なのは仕方ないね、どこかに鬱憤を晴らせる場所が無いといけない）
兄妹たちの顔と事情をゆっくり思いだし、（やっぱりポスターは無理か）とため息を吐く。こうなったらやはりサリアを直に愛でるしかないのだが、そうすると周囲から「ロリコン」と扱われてしまう。栄えるシューベン商家の長男として、それは少しいただけない。
そこでロイがでた最終手段が「本人にそれとなーくほのめかす作戦」だった。最終的にそれとなくどころかはっきりと断言してきたが、たまった愛情を幾分か伝えられたので、自分としては満足である。

サリュエナの存在を知ったのは2年程前。クレアがとても可愛らしい小店があるので行ってみたいと言ったのがきっかけだった。クレアは普段から真面目な子だから、こういう時はわがままを聞いてあげようと、2人で一緒にその店を訪れた。その店は営業日も営業時間も不定期らしく、「今日はラッキーだ」とクレアが喜んでいたのを思い出す。店の中にはアンティーク調のアクセサリーやちょっとした家具が置いてあって、中々品の良い店だという印象を受けた。
（これならクレアが普段使っていても問題ないね…）
視界に入った蝶をモチーフにした紅色のネックレスに手を伸ばすと、クレアが「あ、」と声をあげてこちらに駆け寄ってきた。
「兄様、それ可愛い」
「ん、気に入った？　合わせてみる？」
「でしたらこの鏡をお使いください」
急に現れた第三者の声に、ハッと振り返ると、濃紺のワンピースを着た黒髪の少女が立っていた。手には瑪瑙のはめ込まれた空色の

手鏡を持っている。
「あ、でもそれ、売り物じゃないんですか…？」
クレアが恐る恐る尋ねると、その少女はニコッと笑った。
「アンティーク品は使ってこそ、ですよ。それに私がここの主人ですから、気にする必要はありません。さぁ、どうぞ」
少女はクレアの前にスッと鏡を差出す。その動作につられるように、手にしていたネックレスをクレアにつけてやると、とても良く似合っていた。
「あぁ、とても可愛いですね。お嬢さんの栗色の髪に映えていますよ。もう少し歳を重ねれば、新しい味わいが生まれるでしょうね」
少し年上の女性(ひと)に褒められたクレアはちょっと気恥ずかしそうにしながら、鏡に映る自分を見ている。
「僕も似合うと思うよ。それを買っていこうか」
「いいの兄様？」
「久しぶりの買い物だろう、遠慮することはないよ」
「ありがとう！」
やったぁ、と喜ぶクレアを笑顔で見つめながら、少女はクレアに話しかける。
「うちの子を引き取ってくださってありがとうございます。それは着けたままでも構いませんよ。それとささやかですが、こちらのお菓子もどうぞ」
そういって彼女は可愛らしいお菓子の詰め合わせを手渡した。よく見れば近所にある有名な菓子店のロゴが入っている。「いつも不定期営業でお客様にご迷惑をおかけしていますからね」、とその少女は笑った。

帰り際、まだ歳は18、9だと見えるその少女に、ロイはふと生まれた疑問を投げかけた。
「失礼ですが、どうしてそのお年で自営業を？」
18歳辺りから働き出す子は少なくない。だが自分で一から仕事

を始める子はあまり居ない。人生経験が足りない為、リスクが高いからだ。
すると少女は、今日一番の笑顔でこう言い放った。
「企業秘密ですよ、お客様」
その花が咲き乱れるような笑顔に、自分の心はがっちり掴まれたのだと、後になってから気づいたのだった。

その後も、クレアと共に何度か店に顔を出して、少しずつ知り合いの立場になった。そして影では自分の持てる力を最大限に活用して、彼女の情報を収集した。魔女だと知った時はその情報をかなり疑ったが、今ではあの店もカモフラージュの一種だったのだと理解している。そして奇跡的に、彼女がティーの身辺警護をすることになった。これはもはや運命だ。
「きっと振り向かせてみますよ」

――ロイ・シューベン、３２歳。１３歳の娘に恋しようと２０歳の女性に恋しようと、年齢差的にちょっと危ないお年頃。素直に好きだと言えない甲斐性なし。現在ちょっと間違った方向から、じわじわサリュエナにアピール中。

実は、「ベルの場合」

ベルの場合

父親と顔を合わせるたびにロイ兄さんの部屋に逃げ込むことを、ロイ兄さん自身は反抗期だから仕方ないことだ思っているようだが、はっきり言わせてもらおう。

「父親が顔を合わせるたびに見合い話を寄越しさえしなければ、自分はいたって素直な人間だ」

と。

第一にだ、どう考えても見合い話をもってくるべき相手は俺ではないはずだ。クイット兄さんは女性にもてているので、当面の心配はないだろう。それよりも、我が家にはもっと結婚すべき人間がいるはずではないだろうか？　そう、３２歳にして独身貴族満喫中のロイ兄さんだ。その抗議も兼ねて毎度ロイ兄さんの部屋に逃げ込んでいると言うのに、どうして父親もロイ兄さんも何とも言わないのか。こんなのは絶対おかしい。俺はまだ１８歳だ。まだ学生だ。どう考えても三十路過ぎた顔面詐欺のロイ兄さんが見合いをするべきではないだろうか。

そこまでひたすら考えて俺はハッとし、それはそれは深く、ふぅっと息を吐いた。こうも長々と考えて、実際に行動に移して、実現するならとっくの昔にやっている。

赤茶けた自分の短髪をがりがりと掻いて、俺は生産性の無いことを考えるのを一度やめることにした。

「当のロイ兄さんは、最近どこぞの幼女の話しかしないしな……」

浮いた話の一つもない兄に期待をかけれるとは思えない。だからといってこの歳で結婚したくない自分は、あの阿呆な父親の方をど

うにかしないといけないようだ。だがあの父親、意外にしつこい。粘っこい。相手をするのも面倒くさい。

「……あぁ、また生産性の無いことを……」

少し暇になるとそのことを考えてしまう可哀そうな自分を誰かどうにかしてほしい。とりあえず体を動かすなりして、違うことを考えよう。以前クレアには「ベル兄様は筋肉ダルマね！」なんて笑顔で言われた気もするが、そんなことは気にしない。誰もボディービルダーみたいにむっきむきなわけじゃない。運動部の人間ならあって当然の筋肉量だ。筋肉の無い優男なんて、クイット兄さんだけで十分だ。

（せめて、がたいがいいとか言ってほしかったけどな……）

少しブルーな気持ちになりながら、何とか気持ちを切り替えようと、ガタッと椅子を引いて、自室から出るためにドアを目指す。そしてドアノブに手をかけようとしたその時だった。ドアがひとりでに開け放たれた。

「やぁベル！　今日は隣町の美女を紹介しよう！　この写真を見てごらん！　なんて素敵な……」

「くたばれクソオヤジ！」

もう部屋からも出たくない。

実は、「ティーの場合」

ティーの場合

半年前から、父様が僕に身辺警護の人間をつかせた。最近うちの家も仕事がうまくいっているらしくて、心配した父様が、せめて一番小さい僕につけよう、と提案したのが始まりだった。身辺警護というくらいだから、どんなごついのがくるのかと、自分の茶色い短髪をくるくるいじりながら身構えていたら、

「初めまして、サリアです」

「は、初めまして…？」

背格好も似通った、同い年くらいの女の子だった。

うちの学校は年齢じゃなくて学力や体力を総合的に鑑みてクラスが編成される。サリアは護衛ということで特別に僕と同じクラスになったけど、普段は全然干渉してこない。転校初日に「ティーの家で働いています」なんて言ったときにはどうなることかと思ったけど、それ以外はふつうのクラスメイトだった。

ただ登下校だけは一緒で、それを他の男子に冷やかされるのが、どうも気恥ずかしかった。

「付き合ってんのかティー！」

「違うって言ってんだろ！」

反対方向からクラスメイトの冷やかしが飛んでくる。違う道を帰るんだから、こっちのことなど気にせずとっとと帰ればいいものを。

「誰がサリアなんかとさ！！」

僕はふんっと鼻を鳴らして少し坂になった石畳を駆け下りる。後ろからサリアの軽い足取りが付いてくる。

正直なところ、サリアはどこか大人びているところがあったし、

周りからの冷やかしもあって、かなりとっつきにくかった。だから登下校の時は、いつも僕が前を歩いて、サリアがその後ろに付いていく、という形になっていた。そうすればサリアの顔を見なくて済むし、八百屋のおばちゃんに挨拶代わりに「仲良しだねぇ」なんて言われなくて済む。

「ィー…」

（大体サリアは仕事で一緒にいるだけだってのっ！みんなしてさ…）

「ティーってば」

「え？」

自分の名前がずっと呼ばれていたことに気が付く。

「どこ行くの、家、あっちでしょ」

サリアが肩を竦めて、自分が進んでいる方向とは逆方向を指す。いろいろ考えている内に、全く違う方向へ歩いてきてしまっていたらしい。だがそれを認めるのは恥ずかしくて、僕は一度サリアに向けた顔を、プイッと逸らした。

「きょ、今日はこっちから帰るんだよ！」

「……そっちは逆方向じゃない。それにそっち、変な人とか出るよ」

「いいんだよ！　大丈夫に決まってんだろ、サリアは嫌ならそっちから帰れば」

言い聞かせるサリアを無視して、一度踏み込んだ裏路地を突き進む。いつも通っている表通りとは違って薄暗いその雰囲気に、すぐにこの道を来たことを後悔した。だが今更引くわけにもいかない。

「ティー…」

「なんだよ、サリアは来なくていいって言ったろ。怖いなら一人で…」

「何々、お子ちゃまがこんな昼間から逢引きかなー？」

「！！」

突如現れた人影に、ビクッと体を震わし、歩みを止めた。行く手には、見るからに全うな社会人には見えない青年が三人。

「ん、なわけないだろ。そこどいてくれよ兄ちゃん、早く帰んなき

ゃなんないんだから」
精いっぱいの虚勢を張って男達を睨むが、こんな子供の睨みがきくわけもなく、男達がゲラゲラと下品に笑う。
「ガキってのは本当偉いなぁ？日が暮れるまでにお家に帰んないとママにしかられちゃうってかぁ」
「そう言うなや、お兄さん達と少し遊んで行けって、なぁ？」
「よく見たらいい服着てんじゃねえか。お前、良いトコのボンボンか」
薄汚い手がこちらに伸ばされてきたその時だった。パシンッと音が鳴り、男の手が払われた。いつの間にか自分のすぐ隣に来ていたサリアが、その男の手を払ったのだ。
「薄汚い手で触るな」
「ば、サリアッ！」
こういう時は下手に刺激してはいけないことくらい、僕だって知っている。今は子供の僕とサリアしかいないのに、どうやってこの状況を乗り切るつもりなのか。
「こ、のくそがき…」
キレた目をした男がぐわっと拳を振るった。僕は、まずい！とサリアを庇おうとしたが、その必要は全くなかった。
「ぎゃあっ！」
サリアは小さい体をスッと男の脇にすべらせ、背後に回ったかと思うと、男の身体を僕に当たらないように思いっきり蹴とばした。そしてその男の結果を見届けることもなく、そのまま体を反転させ、タッと地面を蹴って、後ろに控えていた残りの男の懐に入り込んだ。そしてどこから取り出したのか、両手の中で鈍く光る鈍器を勢いよく彼らの腹部に叩き込んだ。
「ぎゃっ……！」
「うぐぉっ……！」
男達は醜い声をあげて、その場にばたりと倒れ込んだ。そして、サリアはまたその男達の醜態を見つめることもなく、手にしていた

鈍器を僕の方目掛けてビュンッと投げた。
「うわっ！」
ついでに殺られる！直観的にそう感じて思わず両腕を顔の前でクロスさせたが、予想した衝撃は僕には一向に訪れなかった。不思議に思ってそろりと目を開けると、その鈍器は、サリアが最初に攻撃した男の顔面に直撃していた。前のめりに倒れ込んだ後、身を反転して起き上がろうとした男の気配を察して、サリアがとどめをさしたのだ。僕は呆気にとられて、ぽかんとした顔のままサリアに視線をやった。
「……そんな目で見ないで、手加減したから死んでないよ、多分」
だがその時、僕にはサリアの声なんか聞こえていなかった。しばらく呆けた後、ハッと我に返り、サリアに歩み寄って、がしっと彼女の肩を掴んだ。
「テ、ティー？」
「……ぇよサリア……」
「えと、はい？」
「すっげぇよサリア！！　やっぱり警護の人間だけあるんだな！お前まだ13歳だよな？なのにこんなに強いなんて、すっげぇよ！
一瞬だったじゃんか！　どうしたらこんなに強くなれるんだ？僕もお前みたいになれるか！？　教えてくれサリア！」
「えーと……。とりあえず、帰ろう……？」
「おう！」

今思えば、面と向かって素直にサリアと話したのは、あれが初めてだった。
その後、毎日所構わず「サリア！　訓練つけてくれ！」とサリアを追いまわしては彼女にブッ飛ばされていたのは、また別のお話だ。
そしてそれを羨ましそうに、一番上の兄が物陰から見ていたのも、また別のお話。

いつも、「サリュエナの場合」

差し出されたのは、見るからに美味しそうな手作りダミエだった。ダミエとはアイスボックスクッキーのこと。チェック柄が特徴の四角いクッキーだ。いや、今はそんなクッキーの特徴等どうでもいい。問題は、「何故、彼が、私に、それを」差し出しているかなのだ。

「……困りますシューベンさん」

「ロイです」

「……困ります、シューベン、さん」

誰が名前を呼ぶものか。私はシューベンに力を込めて呼ぶ。

「ロイです」

「……ですから、シュー、」

「ロイです」

「シュ、」

「ロイです」

「……ロイさん」

「はい、なんでしょう」

もう言い返せない、そう思って悔しさいっぱいに名前を呼ぶと、凄く嬉しそうな顔をさされた。自分の敗北をひしひしと感じる。そもそもサリュエナとしての彼との付き合いはそう深いものでは無い。お客さん以上友達未満だと認識している。となると名字で相手を呼ぶのはごく自然なことなのだ。だが彼は私がサリアとして振る舞っている時と同様に、彼を名前で呼ぶように強いる。そこまで親密な関係ではない彼が、更に言うなら「サリア愛！」の彼が、サリュエナである私に名前を呼ばせる意味が全く分からない。

だが今はそんなことを気にしている場合ではない。今は、この状況を乗り切らなくてはいけない。

「えぇと、こういうもの貰うのは困ります……というか、その、「あーん」は、困ります」

そう、何故か突然店に訪れてきた彼が、「プレゼントです」と、クッキーを「あーん」させようとしているのだ。何故自分の店の前で「あーん」を強要されなくてはいけない。プレゼントなら素直に包装して手渡ししてくれればいいのに。

「安心してください、手作りですが、衛生には気を配って作りました。それにきちんと美味しいですよ？」

えぇ知ってます、だってそれ私とティーと貴方が、貴方の御宅で作ったんですもの！

（口が裂けても言えませんけど……！）

言いたくて言いたくて、ムズムズする自分の口に何とかチャックをする。そんなサリュエナの心境を知ってか知らずか、ロイはにっこり笑ったまま、そのクッキーを固く閉ざされたサリュエナの口に押し付けてきた。

「むぐ！」

「今日弟とサリアと作ったんです。可愛い子どもが一生懸命作ったんです、どうぞ食べてくださいね？」

「む、ぐ……」

なんという脅し文句だ。それにさっき貴方の御宅で餌付けと言わんばかりに食べさせられてきたのに、まだ食えと言うのか……。いや、貴方は知らないのだろうけれど。

「ダメですか？」

（そんな目で見ないで頂きたい！捨てられた子犬のような瞳で見ないで頂きたい！）

罪悪感に駆られる。そうだ、よく考えれば、お菓子と可愛い子ども（、勿論ティーのみ）に罪は無い。幾ら自分がお腹いっぱいで、食べさせようとしている相手がロリコンであろうと、食べないのは勿体ないことだ。そうだ、食べ物にも子どもにも罪は無いのだ。罪は無い。

「……いただきます」

大の男の潤んだ瞳に負けた私は、自分をなんとか説得し、小さく

口を開いてその甘い菓子を口内に迎え入れた。
「……美味しいです」
素直に感想を述べると、ロイはまたにっこりと笑った。
「でしたらこれ、全部食べさせてさ、」
「あとは自宅で頂きますので！」
勢いよくロイから３０枚近くクッキーの入っている袋を取り上げ、私はまるで飛ぶように店内に逃げ帰った。

もうこれ以上は許してください！

実は、「クイットの場合」

シューベン家のプレーボーイことクイット・シューベンは、腰まで伸びる茶色い長髪を、首の後ろの部分でまとめた、誰もが認める美形だ。そして今も、つい1時間前に別れを告げた女性から逃げてきたところだった。

「いつか刺されそうですよね」

「クイット兄(にい)なら有り得るな」

シューベン家の客間のテーブルでティーとボードゲームをしながら、呆れ気味にクイットに声をかける。するとソファに深く腰掛けていた彼は「えぇ？」と気の抜けた声をあげた。

「二人とも、ちょっと失礼じゃないかい？　幾ら私だって刺されるほど酷いことはしてきていないよ。さっきだってきちんと別れを告げたのに、あっちが何だか結婚する予定だったとかなんだとか勘違いし、」

「あ、チェックです、ティー」

「え、嘘！？　ちょ、サリアってボードゲームも強いのかよ！？　聞いてないし」

「私の話こそ聞いてないよね？」

反応を返して貰えなかったクイットは、構ってくれと言わんばかりにティーに引っ付いてくる。しかしティーも慣れたもので、ばっさりと兄を切り捨てる。

「クイット兄の女性関係は日常茶飯事過ぎて飽きた」

10代前半の少年にここまで言わせるのだから、彼の遍歴はどろっどろの長編小説が出来上がるほどに素晴らしいものなのだろう。実にいい反面教師だ。当のクイットは、今度は私に助けを求めてくる。

「サリアちゃん！　なんとか言ってあげて！」

「……ご愁傷さまです……？」

「いや、そうじゃなくてね？」
もういいよーだ、とクイットは又深くソファに腰かける。横目にクイットを見遣ると、なるほど、気だるそうにソファに身をゆだねるその姿も、なかなか様になっている。世の女性は幾らクイットがダメ男だとわかっていても、この美貌にやられてしまうのだろう。
（可哀そうなのはクイットさんじゃなくて世の女性だな。私は絶対こんなダメ男にはひっかかりませんように……）
心の中で切に願いながら、私はティーとの再戦に思考を戻した。

きゃっきゃっとボードゲームにいそしむ弟とその護衛をちらりと見る。傍（はた）から見れば、とても仲のいい同世代の男の子と女の子だ。微笑ましい光景だろう。
（とてもそういう匂いはしないけれどねぇ……）
ティーが「たまには家で遊ぼう」と連れてきたその子からは、とても１０代前半の女の子と思えない香りがした。成熟した女性の香りだ。果実のように甘くて、男を誘う香り。
（あんな子どもから、どうしたら香るのかなぁ）
マジマジと見つめると視線がばれそうなので、ソファに深く腰掛け横目で観察しつつ思考する。だが答えは簡単には出ない。
（ふむ……。まぁティーがサリアちゃんに抱いている感情は恋愛ではなさそうだし、暫く放置しても大丈夫かなぁ……どっちかって言うとあの目、尊敬の念だし）
熱心にサリアの一挙一動を観察しているティーを見て、思わず苦笑が漏れた。するとその笑いに気付いたのか、サリアがふっとこちらを見る。
（おっと）
「ん？　私もやっと混ぜてくれるの？」
おどけて身を乗り出して見せると、「今僕の番！」とティーには

ねつけられた。やれやれ、と肩を竦めてソファに身を戻す。サリアもそれ以上気にする様子はなく、またティーとのゲームに戻っていった。そして5分も経たないうちに、サリアの後ろにあるドアが開け放たれた。

「ここに居たんですかティー、家庭科の、」

喋りながら部屋に入ってきたロイの姿を確認したサリアと、ティーとボードゲームをしていたサリアの姿を確認したロイが、同時に固まった。両者の異変に、（ん？）と思った時には、両者共すぐに平常を取り戻していた。

「そう、家庭科の実習の練習をしたいと料理長に頼んだのは貴方でしょう、忘れていたんですか？」

「あ、そうだった！」

ティーが忘れてた！とバッと立ち上がる。

「全く……。ほら、厨房に行きますよ。今日はクッキーを焼くそうです。サリア、貴女もご一緒にどうですか」

「え？あ、私なんかがお邪魔してよろしいのですか……？」

「えぇ、是非に」

控え目なサリアの反応に、満面の笑みでロイが返事を返した。そして時は金なりと言わんばかりに、早速3人そろって厨房へと旅立っていった。勿論ボードゲームの片づけはこちらに押し付けて。

仕方なくボードを整理しながら、ロイとサリアの反応を反芻する。

（あれは何かあるよねぇ……）

あの笑顔は弟の友達に向ける笑顔じゃない。そしてサリアのやや引きつったあの顔は、友達の兄にも、護衛者の兄にも向ける顔じゃなかった。

（例えるなら、大好きな女性に向ける笑顔と、その好意にひいてる顔って感じ）

しっかりとボードを元の箱にしまい、よいしょ、と脇腹に抱える。確かこれはティーがロイから借りていたものだ。ならば私がきちんとロイの部屋に返すのが責務だろう。

（いつもいつも、私ばかり女性関係に悩むのは、フェアじゃないよね）

知りたいと思ったら、知らなきゃ気が済まないのはシューベン家の性分である。幸い、クッキーが焼けるまで、まだ時間はたんとある。

ところで、「ベルの場合2」

クレアのお菓子の買出しに付き添って、俺は今、街で有名な菓子店に来ている。本来なら厨房の人間に頼んで買ってきてもらえばいいのだが、やはり自分で選ぶのが楽しいらしい。今日は何の予定も無かったから別に構わない。しかし巷の女子に人気のこの可愛らしいピンク壁の菓子店で、１８の男が妹と2人きりで買い物している図は、なんとも言い難い。

「……クレア、外で待ってる」

「うん、先に帰ったりしないでね、ベル兄様」

「心配しなくてもボーっとしてる」

クレアの許可を得て、広い店の外に出ることにした。しかし店の玄関に近づいたところで、ドンッと目の前の女性にぶつかった。

「っと、すみません！」

自分の肩に当たって、濃紺のワンピースを着た小柄な女性がよろけてしまい、慌ててその女性の肩を抱いた。

「あ、ありがとうございます。前を見ていなくて…すみません」

女性は体勢を立て直し、ぺこりと頭を下げて謝る。お菓子を入れる編みかごを両手で抱えている姿は、まるで花摘みから戻ってきた農家の娘のようだった。

「ベル兄様！　もう、兄様は筋肉ダルマなんですから気を付けてください！」

一連の流れを見ていたクレアがトトトッと駆けよって来て、女性に謝る。

「うちの兄様がすみません、お怪我はありませんか？」

「いえ、大丈夫です……って、あら？　クレアさん？」

「サリュエナさん！」

女性の顔を確認したクレアが嬉しそうに女性の名前を呼ぶ。

「クレア、知り合いか？」

「はい、アンティーク雑貨屋さんを経営してる、サリュエナさんです。サリュエナさん、こちらの筋肉ダルマが兄のベルです」
また筋肉ダルマと口にして、クレアがサリュエナさんに紹介をする。筋肉ダルマと連呼されると、仮に悪意がなかったのだとしても段々傷ついていくということをこの妹に知ってほしい。
「そうだったんですか。初めまして、私サリュエナと申します。いつもロイさんとクレアさんにはご贔屓にしてもらっています」
そんな思春期真っ盛りの男の気持ちなど知るはずもなく、サリュエナさんはふわりと笑って自己紹介した。こちらも慌てて自己紹介する。
「ベル・シューベンです。いつもうちの兄妹がお世話になっています。お怪我が無くて良かったです」
「私の方こそ、きちんと前を見ていなくてごめんなさい。今日明日久しぶりにお店を開ける予定だから、張り切って買い込んでしまって」
サリュエナさんは恥ずかしそうに笑う。
「今日明日、お店お開けになるんですか？」
クレアがきらきらとした目で問いかける。どうやらサリュエナさんがやっているお店は不定期営業のようだ。
「はい、宜しければ来てくださいね」
ぱぁあっと笑顔の広がったクレアが「はい！」と返事をしたところで、「サリュー！会計するなら早くしないと、きちんと列に並んでもらうわよ！」とレジの方から声がかかった。
「お店の方もお知り合いなんですか？」
「えぇ、私の人生のお師匠様みたいな方です。ちょっと口うるさいけど、いい人なんですよ」
「一言多いよ、サリュー！」
「……そして地獄耳なんです。もう、今行きますから！」
そしてサリュエナさんがレジに向かおうとした時だった。
「今日明日はお店開いてるんですね」

サリュエナさんの肩がビクンッとはねた。
「こんにちはサリュエナさん、こんなところで会えるなんて奇遇ですね」
「なんで居るんだ、ロイ兄さん」
「なんで居るのかしら、ロイ兄様」
我らがシューベン家の長男、ロイ兄さんが満面の笑みでサリュエナさんの後ろに立っていた。何故満面の笑み。
「ロ、ロイさん。奇遇です、ね……？」
語尾に疑問符をつけ、サリュエナさんがやや引きつった顔でロイ兄さんに笑顔を返す。
「えぇ、奇遇ですね。今日明日明後日は三連休で学校もないでしょう？ティーもサリアに会えなくて暇だろうと思って、一緒に街に遊びに来ていたところなんです」
誰も聞いていないのに、ロイ兄さんが満面の笑みを維持したまま「何故ここに居るのか」を説明する。しかしティーの為と言う割には、ティーの姿がない。
「ロイ兄さん、ティーは？」
「あれ、居ない？」
はた、と気付いたようにロイ兄さんが辺りを見回す。しかし店内にティーと思しき少年の姿はない。クレアが「え、ロイ兄様、もしかして置いてきたんですか！？」と叫ぶ。「そうかも」とロイ兄さんが暢気に返す。
（この人は一体街に何をしに来たんだろう……）
ロイ兄さんに代わって慌てるクレアを落ち着かせ、俺は深いため息を吐いて、今頃1人でわたわたしている弟を探すために店を出たのだった。

ティーはロイが街中を歩きまわる為だけの口実だった事を知っているのは、家で留守番している次男と、ティーを口実に使った長男本人だけだった。

ところで、「サリュエナの場合2」

金色の髪を乱れなくピッチリとまとめあげ、クリーム色のワンピースに白いエプロンを身にまとい、忙しげに菓子店を仕切るその女性は、歳は３５歳くらいで、少しきつい顔立ち。それでもそのハキハキした性格から、老若男女問わず好かれている。その人の名前は、ルル・マホット。私サリュエナの人生の師匠にして、魔女としての師匠である。

彼女が使うのは「人を幸せな気持ちにする」魔法。大きく使えば麻薬のような効果を発し、小さく使えば食後の甘いデザートのような効果を発する、なんとも面白い魔法だ。彼女はその魔法を小さく使い、店で作るお菓子にちょっと振りかけて売っている。だからこのルルの経営する菓子店は、ルルが魔女である事を隠しながらも、「食べると幸せな気持ちになれる菓子店」として巷で有名だった。

「で？　さっきのが噂のロリコンのお兄さん？」

自分の店に帰ろうとしていた私を呼び止めたルルが、店の休憩室に私を連れ込み、唐突に切り出した。

「あぁ、はい。ロイ・シューベンさんです……」

すっかり顔なじみになったお店のスタッフさんに出してもらった紅茶をすすりながら、私は少し遠い目をする。やはり彼は一目みただけではロリコンに見えないのだ。私も暴露されるまで分からなかったのだから当然だが。

「へぇえ？　私にはそう見えなかったけど？　どっちかっていうと、あんたの事好いてる感じだった」

好いている、とはどういう感じなのかわからないが、私は私自身の意見を述べる。

「でもあの方、サリアの事が気になって仕方ないって……」

「でも私にはそう見えた。あぁ、もしかして、サリアとサリューは

同一人物ってバレてるんじゃないの？だからサリアにもアタックしてるとか？」
　ルルは自分の店の茶菓子を頬張りながら、楽しそうに笑った。私は予想だにしていなかった返しに、「まさか」と苦笑いする。
「だって私、覚えてる限り、バレるようなことしてませんよ？」
「でもあの人、シューベン家の人なんでしょ？　だったらバレてても不思議じゃないと思うけど？」
「え？」
　シューベン家だから不思議ではないという言葉に、私が何の事だかわからない、という顔をしていると、ルルが逆に「えぇ？」という顔をして驚いた。
「シューベン家は最近めきめき力をつけてる商家よ？　商家に最も求められる能力の１つが情報収集能力じゃない。だからこそ、間接的ではあるけど、魔女に護衛なんて大それた依頼ができたんだと思わない？　そんな情報収集能力があれば、バレててもおかしくないでしょう？」
　その言葉に、私は背筋がゾクッとした。
（まさか、まさかとは思うが、個人情報、収集されていますか…？）
　そんな私の不安を読み取ったかのように、ルルはティーカップを口元に運びながら、にっこりと笑う。
「幾ら私達が魔女という素性を隠していると言っても、私達は世間の方々から魔女として仕事を請け負ってるんだから、完全に隠し通せることなんで出来ないでしょ」
　そう、そうなのだ。魔女として世の人々と付き合っていけば、必ずどこかに隙がうまれ、綻びが生まれる。いくらこちらが簡単にバレないように色々と手を回しても、桁違いの情報収集能力を持つ者に調べられれば、バレてしまうこともある。
「じゃ、じゃあ、じゃあですよ！仮に、ロイさんがサリアとサリュエナの事が同一人物だと知っていて、且つ私の事を好いてくれているとします。それならなんで、なんで最初から今までサリアだけに

アタックしてるんですか！？」
「ロリコンだからじゃないかしら……」
「やっぱりそうなるんですね……！！」

この悩みを解決したいが為に発した素朴な疑問は、最初の「ロイさんはロリコン」問題へと回帰させるだけだった。

ついに、「ロイの場合3」

弟に言われてやっと気づいたことがある。サリュエナ自身に好きですと言って、それからサリアの秘密を知っているといった方が、格段に手っ取り早かったのではないか、と。

「……」

後の祭りとはこういう事を言う。

「だからロイはサリュエナさんに良い顔されないんだよ？」

「……」

「そんな方法でアプローチとか、それってサリアちゃんの事はバレてないと思ってるサリュエナさんにとっては、「この人ロリコン……！？」ってなって当然じゃない？」

「……」

「大体さぁ、なんでそういう風にアプローチしちゃうかなぁ？　普通に考えてみてもさ、好きな子の前で、他の女の人のことをめちゃくちゃ褒めるって、有り得ないでしょ？　ロリコン疑惑が生まれたなら尚更近づき難いじゃない。これだからロイはいつまで経っても結婚で、」

「もうその辺でやめてくださいクイット、世界がにじんできました」

そっと目頭を押さえて、自室の机に突っ伏す。机周りには仕事の書類と個人的な書類、そしてサリュエナに関しての調査書が散乱していた。どれもこれも、自分がしばらく外出していた間にクイットがやったものだ。まさかこんなに散らかされた上に、サリュエナの書類を発見されるとは思っていなかった。「前回は見付けらなかったんだけど、やっと今回見付けたんだ」と、満面の笑みで喋るクイットを見て、一見のらりくらりと生きている弟をなめていたことを反省した。

「今からでもきちんと話してみれば？　何もしないでこのままロリコン疑惑を深めていくよりは、いい方向に進むかもよ」

まぁ落ち込まないでよ、とクイットがポンポンッと肩をたたいてくる。
「それにサリュエナさんがダメだったとしても次があるじゃない！」
「サリュエナさんが好きなんです……」
励ましのつもりで掛けられたであろう言葉に、更にがっくりと肩を落とす。お付き合いしている女性が次から次へと変わるクイットにしてみれば、Aがダメなら B！の思考で全く構わないのだろう。だがクイットと違って恋愛慣れしていない自分は、サリュエナに振られてすぐに次の人を好きになることは出来ない。きっとダラダラとサリュエナへの想いを引きずる。それに直ぐに次へと行動が出来ていれば、この歳まで独身など貫いていない。
「32歳まで独身引きずるとこうなるのか。私も早い内に身を固めた方がいいのかもしれないね」
「クイットは結婚する前に刺されるから心配いりませんよ」
ボソッと呟かれた言葉にボソッと嫌味を返してみるが、クイットは気にせず先ほどの話を再開する。
「ロイの話に戻すけど。取りあえず、1度きちんとサリュエナさんに秘密を知っていることを話した方がいいね」
「そう、ですね……」
「何、そのやる気のない返事。私がサリュエナさんにアタックしに行ってもい、」
「来週の土曜日辺りはどうでしょう、来週の土曜日も午後からお店開くらしいのですが！」
「じゃあ来週」
クイットにだけは手を出されるわけにはいかないと焦って返事をしたせいで、一世一代のプロポーズの日付が、弟の掌の上で決められていた。
こんなまぶしい笑顔を見せられて、次は何をされるのだろうと、気が気ではない休日の夜だった。

なんと、「ティーの場合2」

「サリアー、早く帰ろうー」
「今行くからちょっと待って」
教室のドアのところから声をかけると、サリアは少し急いで教科書を鞄に詰めて、よいしょ、と肩に掛けた。教科書なんて学校に置いて行けばいいのに、サリアは本当に真面目だ。僕の鞄なんて筆箱とちょっとしたファイルしか入ってないから、ものすごく軽い。
「今日家来る？」
やっとサリアがドアのところまでやってきたので、2人で並んで廊下を歩きだす。
「……宿題？　それとも稽古？」
「稽古！」
「宿題が終わったら、ね」
サリアが呆れ顔で肩を竦めるが、そんなのは気にしない。宿題が終わったらしてもいいと言うのなら、さっさと家に帰って宿題を終わらせ、そして稽古だ。
「僕15になったら見習試(みならいし)受けようと思う」
見習試、その正式名称は見習い試験。見習試とは、軍に入るための試験、通称軍試を受ける前に、本当に軍人になる素質があるのか見極める試験だ。素質の無い人間を軍に放り込み混乱や迷惑を生まない為に、そして軍に入ったらすぐに使える人間を育成する為に作られた。見習試に受かれば、2年の見習い期間という名の本格的な訓練を経て、軍試を受ける資格が与えられる。ちなみに見習いの間は少ないが給料も支給されたり、先輩軍人の手伝いにと軍施設の中に駆り出されたりすることもある。
「ティーは軍試受けて、軍に入りたいってこと？」
サリアの問いかけに、僕はうーん、と首を捻る。
「まだそこまでは考えてない。でもとりあえず専門家の居るところ

で自分の限界知りたいって言うか、サリアみたいに強くなりたいって言うか。別に見習い卒業した後、絶対軍試受けなきゃいけないってわけじゃないだろ？　体力づくりの為に見習試受けるのも公認されてるし、とりあえず入ってから決めようと思ってる」
　喋りながら下駄箱に内履きをしまって外履きに履き替えていると、サリアがさっきの僕の言葉に返すように、ぼそっと「まぁ、2年やって芽が出ない人もいるからね……」とこぼした。
「え、何それ、僕将来性ない！？」
　バッと顔をあげて、既に靴を履きかえていたサリアを見上げると、サリアはげっ、という顔をして目を逸らした。紺色のワンピースがサリアの動きに合わせてひらりと揺れる。
「そういう意味で言ったんじゃないけど、やってみない事には、ねぇ……？」
「うっわ嫌味！　そうだよなぁ、サリアはいいよなぁ、軍人の親戚が居たんだっけ？　稽古つけてくれる人居たんだもんな」
　きちんと外履きに履き替えて立ち上がり、視線の位置をサリアに合わせて睨むと、サリアは苦笑いした。
「でも素質が無かったら結局芽は出ないもの、試験受けていても個人稽古つけていても同じことだよ」
「あぁ、それもそっか。でもやっぱり羨ましいぃ」
　納得はしたが、それでも羨ましくて、僕はブーブー言い続ける。サリアは気まずそうに苦笑いしたままだ。
　――これは後で知ったことだが、実はサリアに軍人の親戚などおらず、きちんと2年の見習い期間を経て、3年も軍で働いていたそうだ。だからこの時苦笑いだったわけだ。
　サリアがため息を吐きつつ、校舎を出る僕に続く。
「まぁ見習試まで、微力だけど私が稽古つけるから」
「おう！」
「その代わり、見習試に受かるまでは、危険な場面では私に頼る約束だからね」

「おう！」
後半を空返事で返し、僕らは校門をくぐって学校の敷地を出た。以前はちょっと気恥ずかしかったサリアとの登下校も、今では色んな話が出来る楽しい時間になっていた。

そうやっていつも通りの石畳を歩きながら、いつも通りの分岐点に差し掛かった時だった。急に辺りの人気が引いたかと思うと、誰かにドンッ！！と強く路地裏に突き飛ばされた。
「うわっ！！」
ドシンッ！と、じめっとした石畳に尻餅をつく。サリアも驚いた声をあげて僕の隣に倒れ込んだ。
「っいってぇ……！」
尻だけでなく、掌からも痛みがじんじんと伝わってくる。身体を支えるために咄嗟に地面に付いたせいで、擦り傷を負ってしまったようだった。痛みに耐えていると、スッと、自分に人影が被さった。
「っ……なんだよ、あぶねっ……」
抗議の声をあげようとして、僕は言葉を切った。
「よぉお、ひっさしぶりじゃねえのぉ？」
僕らを覗き込んでいたのは、以前僕らにいちゃもんをつけてサリアにこてんぱんにされた男達だった。１つ違ったのは、その数が倍以上に増えていたこと。

ついに、「サリュエナの場合3」

ティーといつも通り下校していると、突然後ろから身体を突き飛ばされた。あまりに突然の事に、まるでか弱い少女のようにあっけなく路地裏に倒れ込んでしまう。

「よぉお、ひっさしぶりじゃねえのぉ？」

その声は聞き覚えのある、あまりに阿呆そうな声だった。

「あんた……！」

ティーが驚いたように声をあげる。

「おめぇらのせいで暫くムショのお世話になっちまったじゃねえか。今日はそのお礼してやんよクソガキィ」

キレているのかイッているのか、その男はゆらゆら揺れながらこちらを脅してきた。その後ろに居る人間も含めれば、ざっと8人。この男が声をかけて集めてきたのだろう。

（子どもの身体1つで、8人は、さすがにきつい……）

突き飛ばされたのは狭い路地裏。相手は大の大人8人。こちらは戦力外の少年1人に13歳の少女1人。今までの経験から考えても常識的に考えても、あまりに不利なのは明白だ。

「サリア……！」

私の左横で心配そうに声をあげるティーを見て、私はその肩に手を置きグッと力を入れ、彼をけん制する。

「私に頼る約束は違えないよね？」

するとティーが目を丸くする。「なんでバレた」と言わんばかりの表情だ。

「そんな力んでれば誰だってわかるよ……」

苦笑を漏らすと、ティーが少しむっとする。力になろうとしてくれるのは嬉しいが、この場合私がティーの護衛なのだから、そうそう助けてもらうわけにはいかない。ティーはまだきちんとした訓練を受けていないのだからなおさらだ。そうやって男達を無視する私

達の態度が気に入らなかったのか、集団の後ろの方で控えていた男が、「無視してんじゃねえぞ！」とお決まりの文句で前に躍り出てきた。私は瞬時に身を起こし、その突進してくる男の急所、股間を蹴り上げた。馬鹿の一つ覚えのように突っ込んできた彼の勢いも助け、かなりのヒットとなったようで、男は醜いうめき声をあげてその場にへたり込んだ。

「て、めぇっ……！」

無様に背を丸める仲間の姿を見た他の男達が、逆恨みとしか言いようがない声をあげ、じりじりと詰め寄ってくる。

（今のはどう考えてもあっちが悪い……っていうか、今のは誰でも出来たから）

だが男達はそんなことを考える余裕はないようだ。じりじりじりじりと寄ってくる。幾ら8人から7人に減ったといっても、この人数に一気に襲い掛かられたら、さすがに一たまりもない。

「……仕方ない、かな」

「サリア？」

急に何を言い出したのかと、ティーが私を見上げてくる。私ははぁ、と深くため息を吐き、ティーに視線をおろした。

「ティー、これから起こる事を、絶対に他言しないって約束できる？」

「え？」

「約束しないと殴るけど」

「約束する！」

半ば脅し、というより本気でティーを脅し、約束を取り付ける。

「良い返事。じゃあ……」

今まで人目につく可能性のある場所でこのような事をした試しは無いが、ティーを守る事が、今私が優先すべきことなのだから躊躇う事は無い。

「少しばかり後悔して頂きましょう？」

視界の端でティーの肩がビクッと揺れるのが見えた。殺気を感じ

取れる程には成長したという事だ。私は内心関心しながら、１歩男達の方へと踏み出した。
「な、んだおめぇ……」
先頭に立っていた男が詰めていた足の動きを鈍らせる。
「何でしょう？　その目でしかと確認してみてくださいね？」
辺りの空気がざわっと揺れ、元々暗かった路地裏に一層闇がかかる。私の膝丈のワンピースが意思を持ったかのように波打ちだして、セミロングの黒髪がふわりと浮いて私の顔を包み隠し、両者その長さを変えていく。異様な光景に男達から「ひっ！？」という悲鳴が漏れるのが聞こえた。
「おおおお前！！　なんだ、なんなんだ！」
震える声で男が叫ぶ。まるで化け物でも見たような脅えっぷりだ。だが残念ながら私は「化け物では」ない。
「そんなに脅えないでくださいな」
「な、なっ……！！！」
辺りに渦巻く暗い雰囲気を吸収し、すっと背を伸ばせば、それは完成する。身長は一気に伸びて１６２、髪の毛はウェーブのかかった黒の長髪、瞳は同じまま、クリアブルーの瞳。ワンピースは膝丈のまま変わらないものの、身体に合わせて伸縮させてある。
私は普段より短めのワンピースの裾をつまんで、にこり、と笑って見せた。
「お初にお目にかかります。私、長年魔女をやっております、サリュエナ・ルーベルク、と申します」
小さなどよめきが起こる。この瞬間こそ、私は自分が「魔女である」と確信を持てる絶対の時だと思っている。
「ま、魔女っ……！？」
驚愕の声をあげたのは、何も男達だけでなく、ティーもだった。目も口もこれでもかと言うほど大きく開かれている。
（……さすがにあとできちんと説明してあげなくては）
心の中でティーに謝りつつ、私はタンッと地を蹴った。大人の身

体なら、7人位楽なものだ。

＊＊

路地裏から逃げようとする男達を一人ずつ地面にたたき潰し、路地裏からの脱出を阻む。そして自分が路地裏の出口に陣取り、男達を袋のネズミにした。退路を断たれた男達は案の定僕を人質に取ろうとした。が、僕に手を伸ばした瞬間サリュエナの左ストレートがその男の顔に決まった。男がよろめいて少し屈んだ瞬間、更に渾身の前蹴りが顔面を襲い、完全にノックアウトする。そしてまた奥へ奥へと追い詰められていく残りの男達。そしてとてもさわやかな笑顔で男達を落としていくサリア、いや、サリュエナ。まるで久々の体育に汗を流す若き男子学生のようだ。

魔法こそ使わなかったものの、あの笑顔と冴えわたるストレートと前蹴りを操る姿は、誰がどう見ても魔女そのものだったと、僕には断言できた。

――のちに、ワンピースが伸びたことはサリュエナの年齢詐称の魔法では説明できないと気づいた僕が、何気なくその事を聞いたところ、

「それは乙女の秘密ですよ、ティー」

と返された。本人いわく、乙女の秘密は乙女の秘密であり、決して魔法ではないという。なんだそれ。

そして、「ロイの場合４」

今日の分の商談を終えて、帰路に付いていた時だった。午後４時という時間帯上、元々まばらだった人影が、サッと引いて更に少なくなった。道に残った人々は店や建物の方に視線をやり、なるべく道の端っこを歩く。何だ何だと思い行く手を見ると、見るからに柄の悪い男達が７・８人、肩で風を切りながらこちらに向かって闊歩していた。（これから帰宅だというのに面倒事を起こすのもな）と思い、僕も少し身を寄せ、彼らの横を通り過ぎる。すると、他の人のように大袈裟に道を譲らなかったせいだろうか、一瞥された。しかしこちらもこちらで肩がギリギリ当たらない距離ですれ違ってやったので、いちゃもんを付けられることは無かった。

（今何も悪い事はしていないし、通報するわけにもねぇ）

一瞥されたことで一瞬通報してやろうかとも思ったが、ああいうのは現行犯逮捕でなくては意味が無い。とりあえず今は何事も起らなかったので、気分転換に近くの本屋に寄り道して帰ることにした。

（あ、新刊）

表通りから１本逸れた馴染みの本屋を覗いてみると、クレアが好きだと言っていた恋愛小説の新刊が出ていた。新刊の表紙には黒いドレスをまとった黒髪の女性と、白い詰め襟を着た白髪の男性が描かれている。この小説は、見た目が黒いだけで悪い魔女と忌み嫌われた魔女と、その魔女を倒す為に立ち上がった何も知らない軍人による、恋愛ファンタジー小説だそうだ。はっきり言って、この手の小説を普段は全く読まない。しかし食わず嫌いはいかん、物は試しにと１度読んで見たところ、今ではクレアと共有して読むほどになってしまった。

（絶対この魔女のキャラ設定のせいですよね……）

新刊を手に取り、ぱらりと挿絵に目をやる。
――本当は悪い事なんて嫌いなのに、言いだせない魔女。忌み嫌われても、皆の為に頑張る魔女。絶対に悪い事はしない魔女。黒髪の綺麗な魔女。
くすり、と思わず笑いが零れる。
――本当は痛いことは嫌いなのに、5年も従軍した魔女。その力で、誰かを守ろうと頑張る魔女。絶対に悪い事はしない魔女。黒髪の綺麗な魔女。
頭の中では彼女（サリュエナ）の事を思い浮かべながら、今回のあらすじを確認する。今回はついに白髪の軍人が黒髪の魔女の実態を知り、一気に距離が縮まるらしい。これは早く読みたいが、クレアが既に買っていたら勿体ない。とりあえず新刊は元の場所に戻し、少し他の本を物色した。だがこれといって欲しい本は無く、結局何も買わずに本屋を出ることにした。と、その時、奥の方で整理をしていて、今までこちらに気付いていなかった老店主に声をかけられた。
「ありゃ、入れ違いですかぁ」
「入れ違い、ですか？」
何の事だか分からず、老店主の言葉を復唱してしまう。だが老店主はそれに気付かず、最近、白髪（しらが）の占める量が多くなってきた頭をぼりぼり掻きながら「ありゃりゃ」と声をあげた。
「もうちょっと早かったらねぇ」
「えぇと……」
もっと具体的に話して欲しくて困った顔をしてみせると、老店主が、「あぁ」とやっと気づく。そして店の玄関のところまで出てきて、表通りの方向を指さす。
「さっき表通りまで出てきたとこでねぇ、ティーぼっちゃんとお友達とすれ違ったんですよぉ」
「あぁ、ティーと……」
そういえばもう下校の時間だ。老店主がティーとすれ違っていて、その後に自分を見て「迎えに来たのか」と思ってしまっても不思議

ではない。ただティーにはサリアという最強の護衛が付いているから、誰が迎えに行く必要もないのだが。
「……ん？　ティー？」
ふと、何かが自分の中で引っかかった。引っかかったのはティー。ティーが一体どうしたというのか。ティーがサリアと一緒に下校していることか？しかしそれではない。羨ましいことだが、実に羨ましいことだが、引っかかったのはそれではない。
「ロイさん？　どうしましたかぁ？」
老店主のやけに語尾が間延びした声がするが、内容は入ってこない。
「ティー……」
書類鞄を小脇に抱え、店の入り口を占領したまま、自分の記憶と思考を整理する。どこに、何が、引っかかったのか。現在から、記憶を巻き戻していく。すると、それはすぐに見つかった。
「あ」
「？　ロイさん？」
そうだ、何だか見覚えがあるような、ないような、いや、あるような気がしていたのだ。以前報告書で見た顔だ。
「この前ティーとサリアに喧嘩打った方々」
ぽんっと手を打ったところで、彼らが今頃何をして何をされているのか、安易に想像できた。

表通りをしばらく歩き、生活道路への分岐点にさしかかると、その別れた道路の中でも普段は人気のない暗い路地裏から、人のうごめく気配がした。そちらに歩みを近づけると、パンパンッと手を打ってホコリを払う音が聞こえる。事はもう終わっているようだ。
「さて。あとは警邏隊（けいら）でも呼んでどうにか処理してもらいましょう。っと。その前にサリアに戻っておかないと……」
ぼそぼそと女性の呟く声が聞こえる。確かに、今ここにティーと

サリュエナのセットが居たら誰だって不思議がるだろう。ティーとサリュエナの間には、全くつながりが無いのだから当然だ。だがそれを声に出して喋るのはどうかと思う。彼女は仮にも魔女という立場を隠している身だ。ここで1人、話を立ち聞きしている男が居るというのに、全くもって不用心である。

（まぁ、聞いているのが僕だからいいか……）

そんな事を考えると、なんだか自分が特別な存在に感じられ、一瞬ふわっと意識が違う方に行きかけた。が、なんとか現実に意識を戻し、僕はその路地裏に一気に足を踏み入れた。

「きゃっ！？」

「えっロイ兄！？」

突然現れた第三者に、サリュエナとティーが驚いて声をあげる。尻餅をついているティーと、少し拳が赤く腫れたサリュエナ。彼らの向こう、路地裏の最奥には、ゴミのように積まれた7・8人の大の男達。

（あぁ、やっぱりさっきの……）

なんだかとても可哀そうな気持になってしまったので、なるべく大人の塊には目をやらないようにし、僕は固まっているサリュエナとティーに近づいた。

「ティー、けがはありませんね？」

「あ、うん！　僕は大丈夫！」

「それは良かった。サリュエナさん、手を」

「へ！？」

僕の突然の登場に頭が真っ白になっていたであろうサリュエナが、こちらの呼びかけによってハッと我を取り戻した。僕はそんなのはお構いなしにサリュエナの手を取る。

「え、あ、ロロロ、ロイさん！！」

「あぁ、腫れてるだけじゃなくて、擦り傷が……」

「あぁあ、あの！　私、偶然通りかかっただけで！」

「きちんと手当てしなくてはダメですね……」

「自宅で出来ますから問題ないです！　それよりティーッ、」
「何を言っているんですか。これは仕事で負った傷でしょう。雇い主側が手当てをするのは当然ですから、遠慮しないで下さい」
「いえ、そんな！　仕事とはいえ、私が勝手に負った傷ですから！　ですから雇いっ！　……雇、い？　雇い、主……？」
ここまで途切れることなく続いていた会話が、ぷつり、と途切れた。サリュエナの顔が「思考が停止した」と言わんばかりに固まっている。ちらり、とティーを見ると、ティーの顔は「え？　何？」と理解できないと言わんばかりに固まっている。２人の顔を見ると笑いがこみ上げてくるが、そこはグッと堪え、サリュエナの手を取りなおす。
「え、と……？」
「さ、一旦家に帰りましょうか。ほら、いつまで座ってるんですティー。帰りますよ」
「え、え？」
「え？　ロイ兄？　え？」

そうやってサリュエナの手当の為に、３人揃って自宅に帰ってから、僕は大事なことに気が付いた。弟の満面の笑みに迎えられて、気が付いた。
「あああっ！　まだ土曜日じゃなかった！」

そして、「サリュエナの場合４」

私は今シューベン家の応接間に居る。ふかふかしたソファに腰かけていて、隣にはロイが座っている。そのロイと言えば、シューベン家に帰って来てからずっと黙りっぱなしで、私の傷の手当をしてくれていた。

（手当をしてくださるのは嬉しいです。私も色々混乱してますから、考える時間があるのも嬉しいです。でも、でもこんな重たい空気、耐えられない……！）

私は手当を受けていない右手をぎゅっと握りしめた。

応接間に居るのはロイと自分だけ。ティーは「僕平気だし、宿題やんなきゃだから！」とさっさと逃げてしまった。玄関で鉢合わせし、弟だと紹介されたクイットさんは、ロイが「自分でどうにか出来ますから！」と謎の言葉と共に他の部屋へと追い払ってしまった。

（ここは、私から切り出した方がよいのでしょうか……）

不確定要素が多すぎるので、出来れば自分から話し出して墓穴を掘るような事はしたくない。しかしだからと言ってこのシンッとした空気に耐え続けるのも辛かった。

「え、えっと」

意を決してロイに話しかけた。包帯を巻き終え、もう用は無いはずの私の左手を掴んで見つめていたロイは、私の声に反応してフッと顔を上げた。

「あの、」

「黙っていてすみませんでした」

「私、……え？」

私の言葉を遮って、ロイが突然謝罪の言葉を口にした。

「あ、あの？」

「僕の話を、聞いてもらえますか？」

ロイが私の左手を優しく包み込みながら、グッとその視線を私に

固定した。私は反射的にコクコクと頷き、次の言葉を待った。ロイは私を見つめたまま、大きく深呼吸し、そして吐き出した。
「本当、言わなくて済むなら言いたくないというか、出来れば無かったことにしたいというか、今までの言動が恥ずかしい限りなのですが……」
「は、はい」
少し長めの言い訳をし、ロイは決意したかのように一気に吐き出した。
「貴女が魔女だと以前から知っていました。ティーの護衛をつとめる、サリアだと」
私は思考が停止した。

＊＊

「知っ……！？」
という事はつまりあれだ。ルルの言っていた事が正解だったのだ。
（シューベン家なら魔女だと知られていても不思議ではない）
まさか、本当にばれていたとは思わなかった。開いた口が塞がらない。そして言葉が何も出てこない。私は1人、ばれまいと必死に空回りしていたということか、そうなのか。
「すみませんでした」
ロイが申し訳なさそうに目を伏せる。何故だろう、何故かはわからないが、しゅんっと垂れた耳と尻尾が見えた。ロイの告白を脳内で整理した瞬間、「何故知っていた」とか、「何故言ってくれなかった」とか、問い質したいことは山のように生まれていた。だが、この悪いことをして反省している子犬のような男――ただし32歳――を前にして、そんな問い詰めるようなことが出来ようか。
私は一気に脱力して肩を落とした。しかし何かしら返事をしなくて

はならないと思い、なんとか「知っていたなら、是非、もっと早く知りたかったです……」とだけ言葉を絞り出した。ロイは未だしゅんっとしたまま、「すみませんでした」と謝る。
「いえ、もう謝らないで下さい。知られていることに気付いていなかった私も私ですし。今回ティーにも自分からバラしちゃいましたから、まぁ、結果的にはお兄さんにも伝わる事態になってたでしょうし、ね？」
私が苦笑いを返すと、やっとロイが伏せていた目をあげた。その顔はまだすまなそうな表情を浮かべている。だがロイは何も言わず、そのまま沈黙してしまった。かといって私からかける言葉も見つからず、お互いにぎこちない表情のまま沈黙が続く。
頭の中で「どうしよう」と考えていると、ふと、かつて抱いたものの、解決されずに終わっていた疑問が再浮上した。よし、この沈黙を破るのにもちょうどいいから聞いてしまおうではないか。
「あの、そういえば。なんであんなにサリアの事を、えと、褒めてくれてた、んですか？私だって、知ってたんですよね……？」
まさか自分で直接的に「なんで小っちゃい私にアタックしてたんですか！？」とは聞けないので、言葉を選んで質問する。
「あ、それは……貴女の反応が面白かったので」
なんじゃそりゃー！！と私が心の中で叫んだのは言うまでもない。つまり、つまるところ、結局。
「からかわれてただけなんですねっ……！？」
私ときたら、なんて恥ずかしい勘違いをしていたのだろう。ロイはロリコンなのではなく、ただ私の反応を見て面白がっていただけなのだ。それだけなのだ。ロイがサリア、つまり私を好きだなんて勘違いしていたなんて、なんて自惚れていたのか。
何度でも言おう、なんて恥ずかしい勘違いだったのか。これ以上ないほど顔が真っ赤になっているのが、まるで自分を鏡で見ているかのようにわかる。だめだ、これ以上この場に居るのは耐えられないほど顔も身体も熱い。

「わわっ、私ったら、本当に失礼を……！」
「いえ、僕のやり方がよくありませんでした。あの、それでっ、」
「あ、私っ、ティーにもまだきちんと話してなくて！！！　さすがにこのまま有耶無耶にするのはよくないですよね。ちょっとティーにもお話してきます！」
「え？　え！？　まっ、サリュエナさっ、」
私は恥ずかしさのあまりロイの手を振りほどき、ダッシュでその場を辞させてもらったのだった。

「ロイ」
「……何」
どこからともなく現れたクイットが、背後からポンッとロイの肩に手を置く。
「私ね、あの流れは、「サリアじゃなくて貴女が好きだったんです」的な告白にいくものだと思っていたよ……」
「えぇ、僕もそう思っていましたよ……」
クイットは兄の哀愁漂う背中を見つめながら、「ロリコン疑惑から始まる片思いは、そうそう簡単に成就しない」と心のノートにそっとメモったのだった。

シューベン家―学校で、「ベルの場合３：前」

７月ともなると、閉めきった体育館はジメジメと暑いもので、誰もが出来る事なら早々に退出したいと思っているだろう。だがそんな不快な温度に包まれた体育館には、全校生徒約６００人がジャージ姿で待機させられていた。何故朝からこんな目に遭っているのか。

俺達は長期休暇前の定例行事、防犯訓練の事前説明の為に体育館に集められていた。しかし担当教師が「あ、説明資料忘れてきちゃった！　みんなちょっと待っててぇ」等と言って、一旦職員室に戻ってしまったのだ。そしてかれこれ３０分も帰ってこない為、このような苦行を強いられているのである。

全員が全員、心の中で（忘れたんじゃなくて無くしたんだろ……）と毒を吐きながらも、あえて口には出さず、隣同士でおしゃべりをして何とか時間を潰していた。

「朝から面倒くさいこと、この上ない。あっつーい」

耐えかねたオットーが、体育座りした足に顔を埋めながら左隣でぶつぶつと文句を言っていた。オットーは、３年間クラスも部活も一緒の何かと縁がある友人だ。顎まで伸びる少しウェーブがかかった黒髪と、右目の下の無きぼくろが特徴的な、どこか気だるげな奴である。どことなくどっかの兄に似ている気がするのは、気にしないでおく。

俺は「めんどうくさーい」と連呼する友人の横で、ポケットに潜ませていた包みからクッキーを取り出し、パリッ、とかじった。かじった瞬間、ふわりと甘い匂いが口内に広まる。次いでもう１枚口の中に放り込む。

「はっ！　甘い匂い！　ベル何それ！」

オットーがぐりんっと顔を回転させ、こちらを期待に溢れた目で見てきた。

「悪い、もう食べきった」

パンパンっと手を払い、空になった包みをジャージのポケットに押し込む。小さなクッキーだったからすぐ食べきってしまったのは仕方ないが、食べる前に一応聞いておくべきだったかもしれない。
「ずるいなぁ。っていうか、それあの有名な店のだろ？　壁がピンクの。男が入るのは結構勇気いるけど、美味いんだよなぁ」
「クレアが好きなんだ。今日寝坊して朝飯食べ損ねたら、学校来る前にくれた」
「妹とかいるといいよね。今度俺にもちょうだ、」
「クレアちゃんとお付き合いさせてくださいお兄さん！」
突然オットーの隣から熱のこもった声が上がった。俺はその声にげんなりしながら、オットーを超えて近づいてくる顔を、掌いっぱい使ってベシッと制止した。
「近寄るな、ただでさえ暑苦しいのに」
「お兄さんんんっ」
「キィルうっせ」
オットーが不愉快そうに、キィルと呼んだその男子に蹴りを入れる。キィルは、ツンツンと尖らせた黒髪に黒縁眼鏡の、一見真面目そうな学生だ。だがそれは一見だけである。化けの皮をはがしてみれば、どっかの兄より女遊びの激しい超級のプレーボーイだ。1週間で彼女が変わることなど稀ではない。今度は今年入学したばかりのクレアに目を付けているらしい。
「お兄さんじゃないし。そもそも俺に言うな」
「近づこうとすると何故かお前が居る」
どうしてだか分からない、と真面目な顔でキィルが食い下がってくるが、オットーが心底面倒くさそうに「けん制されてんだよ気付け」ともう一度蹴りを入れる。キィルからグフッと鈍い音が漏れ、そのまま静かになった。俺は屍と化したキィルに心の中で合掌しながら、オットーに向き直る。
「座ったまま蹴れるんだから、オットーは器用だよな」
「要は慣れだ」

オットーの目がきらり、と光り、思わず苦笑が漏れた。
ピクリともしないキィルの事はそのまま放っておき、俺達が色々と話に花を咲かせていると、突然体育館後方から「ごめんなさぁい！」とテンションの高い声があがった。その場にいた全員が反射的に後ろを振り返ると、体育館の入口に、この防犯訓練の説明担当の女性教師がいた。やっとのご登場である。
「本当ごめんなさいねぇ。見つからないと思ったら、お弁当の下にあったわぁ」
全体に声がいきわたるようにマイクを掴んだその反対の手には、薄い紙が1枚だけ。たったあれだけの紙に収まる情報の為に３０分以上も待たされたのか。（その位の情報暗記しとけよ……）と、これまた皆が心の中で思ったのは言うまでもない。だが女性教師は暢気にその薄っぺら1枚を読み上げる。
「えぇと。今日は皆大好き防犯訓練です。そもそもうちの学校は、試験的に年齢でクラス分けをしてる数少ない学校よね？　つまり、１６~１８歳までのうら若い子ども達しかいないわけで、危ない思考の人達の標的になりやすいのよねぇ。だから今日は1日いっぱい使って防犯訓練します。覚悟してね！　で、女子全員と、体育がＣ評価以下の文化部男子はＡ棟の実習室に集合してちょうだい。実際の映像を見た後、初歩的な護身術の練習をします。それ以外の運動部男子と、体育Ｂ評価以上の文化部男子は、校庭に集合するように！　説明はその場でしますから。以上でーすっ」
あまりにさっぱりとした説明をし終え、女性教師は満足したようににっこり笑って、早々に体育館から出て行った。それを合図に周りの生徒ががやがやと動きだす。俺達もその動きに合わせ、よっこらせ、と腰をあげた。運動部の生徒が何となく同じ場所に集まって来て、塊になりながら一緒に玄関に向かって歩き出す。
「なぁ、俺達何すんの？」
「体力で分けたんだから、雑用とかじゃん？」
「護身術の初歩とか生ぬるいことするよりはいっかぁ」

「俺雑用より身体動かしてぇ」
「僕は帰りたいんだけど」
「サボると欠席つくってさ」
「マジかー」
各々好き勝手に自分の意見を言いながら、俺達は陽が照る校庭へのろのろと移動した。

＊＊

校庭に出てみると、老教師が木陰の下で待機していた。
「いやはや、みなさん来るのが遅いですよぉ」
老教師が間延びした声で不満をたらす。が、すぐに「暑いですから皆さんも好きな陰に入ってくださいねぇ」と手招きして、生徒を移動させた。
「これで全員すかねぇ？　では説明を始めますよ。ここにいる体力のある皆さんには、実際に不審者に対応してもらいます」
「……実際に対応？」
生徒の中から、「先生意味がわかりません」という声が上がる。老教師が「ううんとですねぇ」と詳しく説明をし直す。
「手配した不審者役の方が校内のどこかに居ますので、ばったり出くわしたら、どうにか対応してください。実際にどうすればいいか、考えながら実行して経験してもらうっていう訓練です。だから逃げちゃだめですよぅ。逃げたら補習です」
生徒たちの間に、体育館に居た時とは明らかに違う質のざわめきが生じた。
「先生、それ、マジですか……」
文化部でありながら、B評価でギリギリこのグループに放り込まれたキィルが、恐る恐る質問する。

「体力のある男子が「きゃあ助けてぇ」なんていう練習するよりは、「きゃあ助けてぇ」と叫ぶ子を助ける方法を実際に学んだ方が、実用的だしかっこいいでしょう？」
キィルは「なるほど！」と即座に納得する。キィルのことだから、「かっこいい」のところだけで納得したのだろう。「かっこいい」かどうかは置いておいて、確かに実際に体験する機会があるのはいいことかもしれない。と、俺が自分に言い聞かせようとしたら。
「それに毎年同じ防犯訓練してたら飽きるじゃないですかぁ」
はい、教師陣の本音が丸聞こえしました。ただの教師陣の暇つぶしじゃないか。実用的などとは、後から取ってつけた理由というわけだ。
「新しい事を取り入れるのは、いつだって大事な事ですからねぇ。それと、不審者の方は、下はピチピチの２０歳から、上はムキムキの６５歳まで、より取り見取りですからぁ、好きな人に襲われてくださいねぇ」
老教師の発言に、ざわざわとうるさくしていた学生たちの間に笑いが零れた。「どうせボランティアとか警邏隊のおっちゃんだろ？」「その位ならさ、数で勝てそうじゃねぇ？」「若い人なら勝てんじゃないか？」「いや、ムキムキとか言うけど、意外にお年寄りの方が勝てるかもしれんぞ」等と、各自が勝ちを想像して一瞬和んだ、次の瞬間。老教師がゴホン、と意味あり気に咳払いをした。生徒達の視線がザッと老教師の笑顔に集まる。
「いいですか、説明を続けますよぉ。今から１０分後に不審者を放ちますので、とりあえず校内に散らばってください。因みに」
「ち、因みに……？」
勇気あるどこかの運動部員が、老教師の言葉の先を促す。
「因みに、全員退役軍人ですので、数で勝とうなどとせず、とりあえず気を付けてくださいねぇ。はい、スタートォ」
「ちっ、くしょぉおおおおおおっ！！！」
俺達は、叫ぶと同時に、一斉に校内に散らばっていった。

変化は突然に

都会の喧騒を離れ、田舎で1人暮らし。野菜類は自給自足。お肉や魚等は約2キロの道のりを経て、集落までまとめ買いをしに行く。自宅であるウッドハウスの周りには広い草原、穏やかに流れる大きな川。その川の向こうにはまだ峰に雪を残す、雄大な山。お隣さんもお向かいさんも居ない。こんな山奥でも、電気、ガス、水道、ネット環境は完璧。だから食料を確保しに出かける時以外はずっとこの家に引きこもっていることが可能。

そう、これこそ私が夢見ていた生活。誰にも邪魔されない、夢の空間。都会で生まれて都会で育ち、都会の喧騒に嫌気が差していた私に与えられた、至福の一時。
しかし平和というものは長く続かないのが世の常で。そんな私の生活を乱す、ふざけた3人組が川向こうに引っ越してきた。

全員変人という、ある意味最高な3人組が。

挨拶に

「あ、れ……？」

いつの間にか、川の向こうに大きめのウッドハウスが建っていた。煙突からは煙が上がっていて、既に人が住んでいることが見て取れる。窓越しにそれを発見した私は、眉間に皺を寄せた。先ほどまで睨めっこしていたパソコンの前から立ち上がり、窓辺によって凝視してみるが、その光景は変わらない。

「うわぁ、いつの間に……。私何日外に出て無かったっけ。あの家運んできたのかなぁ……。いや、そうだよ、運んで来たに決まってるじゃない。組み立てていた期間ずっと気付かなかったとか、いくら引きこもりとは言え、そんな筈ないし、有り得ないし！！」

無理矢理自分に言い聞かせ大きく頷きながら、そそくさとキッチンへと移動し、業務用かと見紛う大きな冷蔵庫に手を掛けた。

「……おおっ？」

しかしその冷蔵庫の中はすっからかんだった。この大きさの冷蔵庫が空とは、本当に軽く数週間は引きこもっていたのかもしれない。ネット上の仕事をしているから滅多に外に出る必要はないと高をくくっていた。

「いや、しかしこれはまずいぞ。食料が尽きたらさすがに死ぬ……」

こんなところで死んだら、そのまま白骨化間違いなしだ。気付いてくれる人が居るとは思えない。

「うぅ、仕方ない。久々の日光浴兼食料確保の外出ついでに、私の夢の世界をぶち壊しそうなお向かいさんに挨拶しにいくか……！」

せっかくの悠々自適な生活にひびが入るのは残念だが、だからといって一度目に入ったものを無視するわけにもいかない。それにこのままいくと、人間との会話方法を忘れそうなので、これは久しぶりに人語を交わす丁度良い機会だ。

ぐーっと背伸びをして身体をほぐしてから、とりあえずシャワー

を浴びに行くことにした。最後に入ったのがいつか、ちょっとばかし記憶があやふやだったから。

「うわぁ鳥さんと豚さん」
お土産にと集落で買ってきた赤ワインを片手に、お向かいさん家の前まで来ていた。自宅の窓からは見えなかったが、お向かいさん家の影になるところでは、数羽の鳥と何匹かの豚が飼われていた。多分食用。
（そういえば最近お肉食べてなかったな、美味しそう……）
「って違った！　挨拶しに来たんだった！」
危うく本能に流されるところだった。爛々と輝いていた自分の目を落ち着かせ、低いところで２つに結わえた黒髪を揺らしながら、木製の階段を上って玄関のドアをノックした。木製のドアは、コンコンッとノックを気持ちよく反響させる。すると中から「はぁい、ちょっと待ってくださいねー」と、若い男性の声がした。
（男の人、なのか……）
自分の格好を確認する。チェック柄のシャツと黒のショートパンツ。先程自宅で着ていた、びろんびろんの部屋着より１００倍マシだ。大丈夫、多分、大丈夫だろう。そうやって不安にしていると、「お待たせしましたー」と、ドアがギィッと外向きに開いた。ハッとなって、咄嗟に笑顔を作って挨拶しようとした。
「こんにちは、川向かいに暮らしているシエンで、」
「あぁなんて可愛らしい方なんですか！！」
突然熱い抱擁を受け、一瞬意識が飛びかけた。
大変だ、お向かいさんは変態さんだっ！！

お向かいさん達は

「こらこら、何してるんだい君は。ごめんね、驚いたでしょう」
訳が分からず混乱していると、奥から更に人が現れたようで、突然抱きついて来た男をベリッと引っ剥がしてくれた。変態から解放され、私は自由になった頭を勢いよく下げてお礼を言う。
「いえ、大丈夫です！　ありがとうございます」
「ふふ、悪いのはこいつだから気にしないで」
男性がゆるりと笑った。少し視線を上げると、男性の腰辺りが視界に入る。その服はあまり見かけない独特な服だった。たっぷりとした柔らかな白の1枚布で身を包んでいて、黒の腰帯で布の流れを調整している。
（民族衣装とかなのかな）
そう思いながら更に視線を上にあげる。すると男性の半円状に肌蹴た胸元からは、鎖骨に沿うように描かれた棘（いばら）の刺青がのぞいていた。
（……やばい！？）
身体に刺青を入れている人など、「その手の人」が大半だ。私は焦りから反射的に顔を上げて、そして硬直した。
危険人物の香りがする男性は、長い黒髪を後ろで結わえ、耳の高さまでのびる前髪を真ん中で分けていた。案の定顔、右頬にも棘の刺青が入っている。しかしそれだけならまだ吃驚して恐がるだけで済んだ。その男性はその手の強面という予想に反して、顔貌の整った、柔和な面持ちの美青年だった。
「どうしたのかな」
「え、あ！　すすす、すみませ……！」
固定していた視線を逃げるようにバッと横に逸らして、私はまた固まった。視線の先には、さっき私に抱きついていただろうと思われる変態さん。その変態さんはワイシャツに黒のベストとズボンで、

まるで紳士のいでたちをしていた。そして金の短髪に包まれたその顔もまた、乙女を撃ち抜く美形のものだった。
「うえ、え！？」
急に現れた美青年２人に驚いて、思わず後ずさった。すると当然、後ろにあった階段との境目を踏み外し、
「あぶなっ……！」
後ろからボフッと誰かに抱きとめられた。声は男性だった。この家の住人の内の１人かもしれない。
「あ、ありがとうございま……！」
慌てて振り返ると、その人は首元から斜め下へとボタンの付いたの白い上着に、黒いスラックスのようなズボンを履いていた。東国に、こういう服を今でも着る人がいたな…等と思いつつ、その男性の顔に視線をあわせると。
「……またっ！？」
ウェーブのかかった顎までの白髪と、顔の脇の１本だけ長い３つ編みが特徴の、美青年だった。

自己紹介を

「あぁ、お向かいさんだったんだね」
「え、あ、はい……」
刺青の男性が微笑みながら、「どうぞ」とティーカップを目の前のテーブルに置いた。

あの後、半ば強制的にお向かいさん家のリビングに連れ込まれた。木目を基調とした彼らのリビングには大きめの白いソファが向かい合わせに置いてあった。部屋の奥側のソファ周辺に美形3人が陣取ったので、流れでもう一方のソファに腰掛けてしまった。

そして今、私は視線を泳がせながら、出されたお茶をすすっていた。4人の間に会話は無く、ただ静かにお茶をすすっているだけなのだ。
「え、えと。お名前、うかがっても良いですか？」
段々居たたまれなくなってきたので、何とか話題を提供してみた。すると先ほどの紳士の顔をした変態さんが、恥ずかしそうに口を開いた。彼はいつの間にか私のソファの右横に回っていた。
「なんていう名前だと思いますー？」
「……チャーリー？」
とりあえず何か答えるべきとの場の空気を読んで、適当に答えてみた。白髪の男性が「何故チャーリー」と突っ込むが、チャーリーと呼ばれた変態さんは、「正解！」と嬉し恥ずかしそうに答えた。それに白髪の男性が「嘘言え！」と噛み付く。
「え、いやいや、私だって何となく、で言ったんですよ？　え、違いますよね？　あの、訂正してくださって全く構いませんので！」
私が慌てふためいていると、向かいのソファに静かに座っていた刺青の男性が「あはは」と笑った。

「なに言ってるんだい、キトル。彼はむかーしむかしからチャーリーだろう？　あ、因みに私はファソンだ、よろしくね」
さりげなく自分の自己紹介をして、刺青の男性、ファソンは笑った。（やっぱり柔和な面持ちの美形さんだなぁ）なんてことを考えていると、ファソンの後ろでつまらなそうに佇んでいた男性が口を開いた。
「俺はキトルだ」
そう自己紹介したのが、さっき転びかけた時に助けてくれた白髪の男性。彼は常に眉間に皺がよっていて、少しばかり強面の美形だ。取りあえず彼の方を直視しないようにしながら、覚えた名前を声に出して確認してみる。
「チャーリーさんにファソンさんにキトルさん、ですね」
「間違ってもキルトとか呼ぶんじゃないぞ」
キトルが眉間に皺を寄せたまま微笑む。何故彼は人の考えていることが分かるのだろうと、私は苦笑いした。

お近づきに

「さて、君はなんて言うのかな」
キトルの視線から逃れるようにずずず……と座る位置をずらしていた私に、ファソンがにっこり問うてきた。そういえばまだ自分の自己紹介をすませていなかった。
「シエンです。今年で１８になります」
「シエンちゃんだね。ちょっと遠いお向かいさんってことで、仲良くしてね」
あまり遊びに来る気はないものだから、とりあえず苦笑いしながら頷いた。すると先ほどからずっと横に控えていたチャーリーもこちらに笑いかけてくる。
「僕らは２０代半ばくらいです！　それと、男３人のむさ苦しいお家ですけど、家畜の肉も有り余ってますので、是非食べるついでに遊びに来てくださいね、シエン様！」
あまりに適当な年齢紹介に突っ込むことも忘れるくらい、私は突然の様付けにぎょっとした。初対面の相手、しかも上下関係などはなく、ただのお向かいさんに様付けで呼ばれたのは初めてだ。
「え、と。シエン、でいいので……」
苦笑いのままお願いしてみるが、チャーリーは何故か引こうとしない。
「いいえ、僕は貴女の下僕ですから！　僕のことはどうぞチャーリーと呼び捨ててください！」
そう嬉しそうに言うチャーリーは、頬を染め、何故か照れている。
「……。ファソンさん。この人どっかおかしいです」
先ほどキトルの視線から逃れるためにずらした位置を、今度はチャーリーから離れるために左にそそそっと移動させる。
「あはは、シエンちゃんたら、確定形で話すんだねぇ。だけどそれが彼の通常運転だから」

「こいつに名前をつけたんだから責任取って下僕になって貰え」
ファソンが笑顔で、キトルが不機嫌そうな顔のままで、チャーリーから逃れられないことを告げる。（犬猫か！）と心の中で突っ込みながら、ごほん、と咳払いする。
「えーっと。どおーしてもお肉が食べたくなったら来ますね？」
だがチャーリーはそんな遠慮はなんのその。
「そんなご遠慮なさらずに！　毎日来てくださって構いませんよ！
僕らはそんなにお肉食べないので、いつでも、幾らでも！」
「あ、はい。本当、たまに……」
（あれ？　自分達で食べないって、何の為に鳥と豚飼ってんだろう。売る用？　でもそれじゃあ迷惑じゃ……）
「勿論お隣さんとお近づきになる用だから遠慮はいらないよ」
「心読まれた！？」
声に出してはいないはずの心の声に返ってきた言葉に、先ほどよりもぎょっとする。が、ファソンはニコッと笑ったままそれ以上は何も言わない。代わりにキトルが言葉を継いだ。
「……まぁこういう面白3人組、という訳だ。好きな時に好きなように来れば良い。大体この家の中に居るか、外で家畜の世話をしているかだからな」
「あ、はい、ありがとうございます。あ。そういえば、本業は何を？」
お向かいさんとなるからには、相手の素性は知っておいたほうが良い。変態紳士が居るならなおの事である。すると、すかさずチャーリーが、ついに私の膝前にひざまずき、その手をスッと取って満面の笑みで言い放った。
「貴女の下僕ですッ！！！」
「ファソンさん」
目の前の男は最早居ないものとして、向かいに座るファソンに回答を求めた。
「早くもスルースキルを身に付けたね。そうだね、僕らはネット関

係の仕事をしているよ。だから一見無職に見えるけれど、きちんと働いているから心配しないで？」
　ね？とファソンに首を傾げて言われると、思わず納得してしまいそうになる。
「確かにネット関係の仕事って一見無職の引きこもりに見えますよね。私もネット関係なんですけど、気付くと１週間……。って、そうじゃなくて！　私はお仕事の中身を、」
　ネット関係の仕事なんてごまんとある。その中身が何なのかによっては、これからのお付き合いを慎重に検討しなくてはいけない。問い質そうとすると、私の両手を包んだ状態のままのチャーリーがいきなり感無量といった声をあげた。
「あぁっ、そんなに僕の事を気に掛けてくださるんですね、シエン様！　貴女の為なら、僕は、僕は、何枚だって脱ぎます！！」
「何故！？　何故脱ぐんですか！？　え、あ、脱がなくていいですからっ！　脱がないで、脱がないでってば！　　本当、脱がないで！　もぉおっ近寄るな変態ぃいっ！！！！！」

　その後も「何故そんな行動に出るの！？」と問いたくなるようなチャーリーの変態行動によって、私の質問は無かったことになってしまったのだった。
あれ、私の幸せ田舎生活は一体どこに行ったのだろう。

小話（前書き）

会話文のみの小話になります。ここまでの話だけだと意味不明な点が多いので、今は読み飛ばして頂いて全く問題ありません。

小話

「巷では美青年と騒がれる男共が3人も揃っているというのに、誰に靡(なび)こうともしないんですね」
「当たり前です。それが彼女という人です」
「そうだよな、良かった。あまり、変わっていなくて」
「……彼女は俺たちの事を知らないという事、ゆめゆめ忘れないで下さいね。特に、オリヴィエ」
「はっ、俺ですか？そんなこと、百も承知ですよ。何のためにここに来たと思っているんです」
「だったら俺の予想外の行動に出るのをやめて欲しいですけどね」
「あぁもう、2人とも。挨拶できただけでも上々だろう？　こんな所まで来て喧嘩はやめてくれ」
「カキ様がそうおっしゃるなら」
「よし。リクトもいいだろ？」
「えぇまぁ。オリヴィエの行動予測が出来ないのなんて、最初から分かっていたことですしね。俺は疲れたから少し休ませてもらいますよ」
「うん、おやすみ。ありがとう、リクト」
「……おやすみなさいませリクト様」
「おやすみ2人とも。明日も彼女に会えるといいね」

これって絶対はめられ、

お1人様幸せ田舎生活希望の末に転居してきた私が、何故3日に1回は（変態含む）お向かいさんの家を訪れなくてはいけないのだろうか。というより、何故訪れているのだろうか。

話は初対面のあの日にさかのぼる。

「ええと、私、1人でひっそりと暮らしたいと思ってあそこに住んでるんです。ですから、あまり頻繁に訪ねて来られたりすると困ってしまうというか……」

ここはきちんとけん制しておく必要があると思い、私は彼らに自分の思いを告げた。さっきまで脱ごう脱ごうと騒いでいたチャーリーは、ファソンによって私が座っているソファの横、つまり床に直に正座させられている。そんなチャーリーを満足そうに睨んでいたキトルが「あ、あぁ」と言葉を漏らし、ごほんと咳払いした。

「それなら心配いらない。俺達は川を渡れない」

「え？」

突然の告白に「どうして？」と首をかしげる私に、チャーリーが気恥ずかしげに言葉を継いだ。

「僕達水が苦手なんですよ。お風呂とかは全然問題ないんですけど、川とか海とか、そういうの渡れないんです」

「え、でも、ここに来るためには川を渡らないと……」

彼らの家は私の家から川を挟んだ向かい側にある。そして彼らの家の後ろには雄大な山がある。その山を越えて来ない限り、川を越えずにこの地に到る事は不可能な地形になっている。まさか、と思ってファソンに視線をやると、視線に気付いたファソンは苦笑いした。

「うん、もう察してると思うけど、わざわざ山を越えてきたんだよ」

なるほど、本当に山を越えてきたのか。それならば彼らがこの地

に来たことに気付かなかったのも仕方ない。それだって普通は途中で気付くだろ、なんて指摘は受け入れない。仕方なかったのだ。
「あ。っていうことは」
そこで私は素晴らしいことに気が付いた。これは素晴らしい。
「じゃあ会いに来なきゃ無理に会わなくていいんじゃないですか……！？」
当人達を前に発する言葉ではないと分かっていても、そのひらめきを心の中に押し込める事は出来なかった。だって私はお1人様幸せ田舎生活希望でこの地に転居してきたのだ。会わなくて済むなら会わない方が気が楽である。特に変態紳士（チャーリー）がいるなら猶（なお）の事だ。
「あ、そういえば」
思い出した、という風に当のチャーリーが声をあげた。
「うちで飼ってる豚さんいるじゃないですか。あれ新種改良した豚さんで、イノシシ並の力を誇るんです」
「……何が言いたいんでしょうか」
聞いちゃいけない気がしたが、聞かずにもいられない。何か含みのある言い方だから、確認しておかないと後々何かありそうだ。
「会いに来ていただけないとなると、けしかけるしかありませんね……」
憂いを帯びた顔でため息をつくチャーリーに、「何を！？」等と言えるだろうか、いや言えなかった。これは聞かずとも分かる。どう考えても、前後の文脈からして「イノシシ並の力を誇る豚」だ。
「う、うちには自給自足用の野菜畑があるんですよ！？　荒らされたりしたら……！」
「それは大変ですね」
ニコッと。まるで花が咲くかのように、大の男がニコッと笑った。状況が状況でなかったら「うっわイケメン！」と顔を赤らめていたところだろう。しかし脅されている状況下でそんな素直な反応が出来るはずもなく、私はもう何度目か分からない救いを求めた視線をファソンに送った。だが返ってきたのはこれまた素敵な笑顔だった。

（ええい仕方ない！）と、意を決して視線をキトルに移すと、速攻で視線を逸らされた。これぞ俗にいう八方ふさがりか。
「え、えぇえ……？」
どうすればいいんだと情けない声をあげると、嬉々としてチャーリーがソファにずりずりと近寄ってきた。さっきの花のような笑顔から一転、頬を染めて乙女のように微笑んでいる。
「そんな、毎日来ていただくなんて厚かましいことお願いできません……2日に1回も来てくだされば……！　一緒にご飯とかお茶をしましょう！」
譲歩してそれか、どこの通い妻だ！と突っ込もうとして、私はふとある事に気が付いた。一緒にご飯？
「そういえば、食糧はどうしてるんですか？　川を越えられないなら集落に降りられないから買えませんよね？　豚や鳥も自分達で食べるようじゃないんですよね？　見たところ畑もないし……業務用並の備蓄でもあるんですか？」
「……」
「……」
「……」
「……あれ？」
素朴な疑問だったのに、その場がシンッと静まり返った。先程まで笑顔だった2人も、フッと視線を逸らして私の顔を見ようとしない。
「え、えっと……？」
どうにか返事を貰おうと、いやいやだがチャーリーが居る方のソファのヘリに近寄ると、チャーリーがぎこちなくこちらを見上げた。
「……食糧、どうしてるんです？」
「……なんとなく？」
何となくってなんだ！
「ちょ、備蓄無いんですか！？　そんなのでどうやって生きていくつもりですか！　大の男が3人も居て、田舎暮らしなめすぎですよ

！」
私はソファから立ち上がり、仁王立ちでチャーリーに説教をかました。ネット通販でもすればいいと思ったのだろうか。こんな田舎だと送料が馬鹿にならないし、届くまでに時間がかかるのは当然だ。今手元に食糧が無いのでは、１週間は何もない状態という事になる。いくら男所帯とはいえ、食糧計画が適当過ぎる。もう一度言おう、田舎暮らしをなめすぎだ。私なんて１カ月半もかけてこの田舎生活の為に準備してきたというのに。
「そうだ、思いついた」
しゅんっとするチャーリーを余所に、ファソンが声をあげた。
「シエンちゃんに買いだしてきてもらえばいいんじゃない？」
突然の提案に、私は思わずはぁ！？と声をあげた。
「なんで私が！　私は、」
「ならば俺達は餓死するしかないな……」
「ぐっ……」
キトルのぼそっとした呟きが胸にグサッと刺さった。
「こういう時こそお隣同士、助け合うものだと思っていたけれど……」
「今時の若い子は違うらしいな……」
誰に話しかけるでもなく漏らされるキトルとファソンの呟きは、確実に私の胸にグッサグッサと突き刺さってくる。何故だ、責められるべきは準備が悪い彼らの方ではないのだろうか。
「ここまで来て死ぬのか……」
「餓死で、ね……」
「あぁ、もう！　買ってきますよ！　買ってくればいいんでしょう！」
いわれのない責めにもう耐えられないと、私はついに自分から承諾してしまった。
「でも女の子１人で３人分もどっと運べませんよ！」
悪あがきして見せるが、チャーリーには通用しない。

「小分けにして頻繁に来てくだされば大丈夫です！」
「頻繁……」
チャーリーの言う頻繁とはどの程度なのだろうか。もう考えたくない。
「勿論代金は2倍払いますよ」
お金の問題ではない。問題は頻繁に彼らの家を訪ねなくてはいけないという、私の田舎生活の夢に反した行為をすることである。そうやって、勢いで承諾したものの腑に落ちない顔をしている私に、チャーリーがとどめをさした。
「豚けしかけるだなんてそんな事、本当はしたくないんですが……」
「えぇいわかった、わかりました！　やればいいんでしょう！　ただし3日に1回以上は来ませんから！！」
するとチャーリーの顔がぱあぁっと輝き、見えるはずのない尻尾が、ぶんぶん振られているのが見えた。あぁ、良いようにハメられたと、これほど実感できたのはこれが初めてだった。
こうやって私は自分で自分の首を絞めたのでした。

これぞセクハラ

「おかえりなさいシエン様！」
「ここは私のお家じゃありません、離れてください」
とりあえず主食が必要だろうと、私は2日連続でヒィヒィ言いながら大量の米をお隣さんの家に運んでいた。「3日に1回以上来ない！」と宣言したものの、流石に米は重いので小分けにして持ってくる為に仕方なく、である。ちなみに1日3往復している。そして何故米なのかというと、パンよりよっぽど腹持ちがいいし、そうそう簡単には減ったり腐ったりしないからだ。これだけの量があれば暫く主食を届ける必要はない。
それに詳しく聞くと、無いのは主食、つまりパンや米で、野菜などはそれなりに確保していたらしい。確かに彼らは食糧が無いとは一言も言っていなかった。きちんと確かめなかった私も悪いが、「餓死する」なんて言われたら全く食糧が無いと思ってしまうではないか。主食が無ければご飯は成立しないのだから、この往復作業は無だではなかったのだが、なんとも言えない敗北感である。
「あ、思い出したら少し腹が立ってきました。いい加減離れてくださいチャーリーさん！！」
やっとの思いで運び込んだ最後の米はファソンが抱えてキッチンに持って行ってくれた。よって後は帰るだけなのだが、玄関に入ってすぐに後ろから抱き着いてきたチャーリーのせいで身動きが取れない。バシバシ叩いてみるが、彼の腕の力が緩む気配は全く無い。
「チャーリーさん、だなんて！！　ね、呼び捨てにしてください？」
ここまで他人の話を聞かない人は初めてである。離せと言っているのに、今呼び方の訂正が必要なのだろうか。しかしそれで解放されるのならば幾らでも呼び捨てにしよう。
「チ、チャーリー……。こ、これでいいですか？」
「あぁっ、なんてっ、甘美なっ……」

「だめだ聞いちゃいない！」
背後からうっとりとした声を漏らされるばかりで何も変化はない。この人に正攻法は通じない気がする。とりあえずこのまま肘を思いっきり後ろにひこうと私が覚悟を決めた瞬間だった。
「ひゃあっ！？」
ヒップのラインをなぞるように、大きな手がふわりと私のお尻を撫でた。
「どどど、どこ触ってんですか！　本気で殴りますよ！？」
今日の私はシフォン素材の灰色のチュニックに、デニムのショーパンという格好であるが、厚手のデニムとはいえ、その感触は直に伝わってくる。
「いえ、あまりに可愛いので、つい……」
「ついセクハラされるこっちの身にもなってください！　あぁもうっそれでも止めないってどういうこと！？」
サワサワと途絶えない感触に肌がぞわりと粟立つ。
「こぉらチャーリー。その辺にしておかないと、折るよ」
キッチンから戻ってきたファソンが、何やら不穏な台詞と共に私をチャーリーから引きはがしてくれた。
「あはは、すみません」
「わぁああファソンさんありがとうございますぅうっ」
少し涙目になりながらファソンにガシッと抱き着き、私はキッとチャーリーを睨みつけた。だがチャーリーの顔はニコニコしたままである。
「この変態っ……！！」
まだ出会って3日ではあるが、本人に言わないでおくことは到底できない。変態紳士だなんて思ってた初日の私を殴りたい、この人はただの変態である、近づいちゃいけない人種である。
「あぁ、そんな……。蔑んでもらえるなんて……」
そして私の言葉や行動すべてを喜んで受け入れる、もしかしたら「ド」が付く変態である。

「あぁもう、止めてくれる？　シエンちゃんが来てくれなくなったら私らは餓死するんだよ？　そういうのは嫌がられない程度にしておいて」
ファソンが苦笑いしながらリビングに向かって歩き出す。私は彼の言葉に心の中で同意しながら、一緒にリビングに続こうとして、ハッと気が付いた。
それって嫌がらなければしていいと、暗に言ってはいませんか……？

しぇいも！　二徹明けの彼

さりげないセクハラ許可発言に戸惑いつつも、ファソンに続いてリビングに入ると、そこには死体が転がっていた。否、キトルが死人のようにソファに寝っ転がっていた。左半身はソファからだらりと投げ出されていて、肘掛に乗せられている顔は目は閉じられ、血の気が引いて真っ青である。

「……キトルさん？」

恐る恐る声をかけると、キトルの身体がビクリ、と動いた。が、そのまま又動かなくなる。

「キ、キトルさん……！？」

明らかに異常な反応だったが、どう対応していいか分からない。どうしようかと1人オロオロしていると、私をリビングに案内して一旦居なくなったファソンが戻ってきた。ファソンは茶器やら茶菓子やらを乗せたトレイを手にしていたが、そんな事気にせず私はファソンに助けを求める。

「ファソンさん！　キトルさんが、キトルさんが死んでますが……！」

「あぁ、彼仕事で二徹明けなんだ。放っておいて大丈夫だよ」

二徹明けというのは、二日連続徹夜明け、という事だろうか。あぁ、だから初日以外姿を見ていなかったのか。

「って納得してる場合じゃありませんよ！　え、大丈夫なんですか？　お部屋で休んだ方が良くないですか？」

私は未だにオロオロしているが、ファソンは「大丈夫ですよ、もう意識が飛んでますから」と暢気に応え、トレイをリビング中央のテーブルに運ぶ。

「それに彼の部屋は2階にあるので、運ぶのが面倒ですし。あ、お茶と茶菓子をお出ししますので、どうぞ休んでいってください」

「え、あ、有難うございます……」

ファソンは何事も無かったかのようにトレイから茶器と茶菓子をテーブルに移している。3日目にしてなんなのだが、彼は意外に腹黒いかもしれないという事に気が付いた。しかしあの状態のキトルを前にしてのんびりお茶を飲むというのは、幾らなんでも憚られる。

「せめて、何か掛けるものとか……」

「あぁ、あっちのソファの後ろにタオルケットが入っているボックスがあります」

ファソンが、キトルが寝ているソファと反対のソファを指さす。そのソファの後ろを覗き込むと、柔らかそうな白のタオルケットがあった。そのタオルケットを手に取って、キトルの元に持っていく。タオルケットを掛ける前に、だらりと垂れている腕と足をソファに戻さなくてはならない。一旦床にタオルケットを起き、キトルの足をソファの上に戻しにかかる。足1本とは言え、意識が無い男性の身体はそれなりに重いので、よいしょ、意気込んで足をソファに戻す。次は腕を戻そうとした時、その腕によって突然自分の腕が掴まれた。

「えっ！？　キトルさん、起きてたんですか？」

吃驚してキトルの顔を覗き込むが、キトルの目はトロンとしていて、今にもまた眠りに落ちてしまいそうである。あぁ、寝ぼけているのか。

「起こしてしまってすみません、風邪でも引いたらと思っ、」

「……あぁ、シエンさんですか。また一層、綺麗になりましたね」

そう呟いてキトルはまたすぅっと眠りに落ちた。

勿論私の顔は真っ赤である。幾ら寝ぼけてたとは言え、先日は終始怒ったような顔をしていたキトルが、眉間に皺も寄せず、突然ふわりと笑って褒めたのだ。これが最近巷で流行りのギャップなんたら、というやつなのだろうか。

自分が真っ赤になっていて、且つ変な事を考えていることに気付いた私は、無理矢理自分を落ち着かせる。と、ふとある事に気が付いた。キトルの口調はもっと激しかった気がする。幾ら寝ぼけてる

とは言え、そうそう簡単に口調が変わるものだろうか。不思議に思い、私は確認の為、茶器に紅茶を注いでいるファソンに視線を送る。

「……寝ぼけてるんですよ」

私の視線に気が付いたファソンはいつも通り笑って流したが、その笑顔が少し強張っていたのは、何故だったのだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5367t/

詰め合わせ。

2012年1月14日22時51分発行